
ココロノカベ

夕咲 紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ココロノカベ

【Nコード】

N5935X

【作者名】

夕咲 紅

【あらすじ】

【独り】を好む少女・綾瀬 遼に、友達と呼べる友達はいない。いつも一人で、ただそこにいる……

【独り】が嫌いな少年・村野 幸介には、多くの友人がいる。彼は【独り】を嫌い、誰とでも仲良くなろうとする……

【独り】を好む少女と、【独り】を嫌う少年が出会った春。物語の幕が開かれる……

序

ある年の春。毎年どこでも行われる入学式。それは、私立秀栄高校でも違わずに行われた。

私立だからと言って特別な所はなく、ごく普通の入学式が行われ、ごく普通の風景が続く。

真面目な生徒もいれば、入学式早々からだらけている生徒もいる。（名前の割りに）特に進学校というわけでもなく、かと言ってそれ程体たらくな学校というわけでもない。とにかく中堅的な位置の学校である。

そんな秀栄高校に今年から通う事になった少年・村野幸介は、どちらかと言えば真面目な生徒である。

勉強はあまり出来る方ではないが、その代わり運動能力が少々長けている。さしあたって、まあどこにでもいる様な少年と言えよう。

そんな幸介だが、彼は人一倍に【孤独】を嫌う。

幼い頃の体験がそうさせるのか、それとも元からの性分なのか……彼は常に明るく元気に、そして社交的であろうとする。

それは入学式という新しい始まりの場でも変わらず、式が終わった早々に、彼は周囲の人間に溶け込んでいた。まるで、旧知の間柄であるかの様に。

ある種の才能とも言えよう。

クラスの発表。年度頭恒例のイベントが始まり、彼は心臓を高鳴らせる。

そう。彼は、新しい友人を作れるという事そのものが楽しみで仕方ないのだ。

彼は掲示された表を眺め、自分のクラスを探す。

すぐに見つかったのか、彼は早速教室へと向かった……

ある年の春。毎年どこでも行われる入学式。それは、私立秀栄高校でも違わずに行われた。私立だからと言って特別な所はなく、ごく普通の入学式が行われ、ごく普通の風景が続いた。

勿論真面目な生徒もいるが、そうでない生徒もいる。（名前の割りに）特に進学校というわけでもなく、かと言ってそれ程体たらくな学校というわけでもない。とにかく、中堅的な位置の学校である。そんな秀栄高校に今年から通う事になった少女・綾瀬遼は、どちらかと言えば真面目な生徒ではない。不真面目。というわけではないが、内向的で、周囲と関わろうとしない。おそらく、事務的に日常を送る少女だ。彼女はあまり運動は出来ないが、その代わりとても頭が良い。記憶力が高く、また要領も良い。だから勉強は出来る。そんな遼は、人一倍【孤独】を好む。

幼い頃の体験がそうさせるのか、それとも元からの性分なのか……彼女は常に他者との接触を避けようとし、【独り】であろうとする。

その独特の雰囲気からか、周囲からも彼女にはあまり近寄らない。彼女はそれを哀しいとは思わず、好都合とし、静かに過ごす。

そんな彼女には、友達と呼べる友達がいない。教師達も、彼女を敬遠する。かと言って問題を起こすというわけでもないの、放っておく。という策に出る。それもまた、彼女にとっては好都合なのだろう。

クラスの発表。年度頭恒例のイベントが始まり、彼女は早く済ませて欲しいと考える。少しして張り出された表を見据え、彼女はすぐに教室に移動する。

彼女は人混みが嫌いだ。わんさかと集まる新入生達の波から逃れる様に、事務的に用件を済ませ、教室へと向かおうというのだ。

それが彼女のスタイルであり、今までも、これからも変わらない意志。

この時はまだ、彼女は知らない。

これから先、【自分】というモノを、一人の少年によって変えられていく事を……

幸介は知らない。これから先、自分が誰かの一生を左右する事になるなどと……

誰も知らない。

【二人】の出会いを、運命が待っている事を……

始まらない始まり

入学式が終わり、授業が始まり、そして数日が経ち……

村野幸介は、毎年恒例の「友達作り」に励んでいた。というより、自然とそうなると言った方が適切かもしれない。

通常授業が始まって三日目。その放課後に、幸介はさっそく新しく出来た友人達と共に、近くのカラオケに行く約束をしていた。

（カラオケか……）

嫌いではない。しかし、あまり歌を歌う事事態が得意ではない為、少しだけ不安になる。今までは友人達との交流と言えば、専ら運動関係だったのだから無理もない。

それでも、嫌いでもないのだから。やはり友人の趣味に合わせる事くらいはする。多少自分が引く事をしないと、友人というのは出来ないものだ。自分本位な考え方では、皆から嫌われてしまう。

幸介は、その事を良く理解しているのだ。もっとも、性格上、それ程自身から引く事は多くはないが……

「村野は、いつもどんなの聞いているんだ？」

そう振ってきたのは、今回の発案者、木島裕二。

問われて、幸介は今正にカラオケに向かっていた事を思い出す。

「うーん……特にコレ。っていうのはないな。ポップスを、適当に聞いているだけって感じかな」

「へー」

「あ、俺は断然ロックだね」

頷く木島と幸介の間に入ってきたのは、中学から木島と友人だった広瀬弘一だ。

「あ、俺もロック派」

と続いたのは、幸介の中学からの友人、中町宏司だ。

幸介は昔からあまり音楽の話をしてない為、中町ともそういった話題で話した事はなかった。友人の知らない一面を知り、何となく嬉しくなる幸介。

「木島はどうなんだよ？」

「俺か？ 俺は、いつもバラード系の曲ばかり聞いている」

幸介が聞くと、木島はちょっとだけ照れた様に答えた。

「へえ、何かイメージと違うな」

「うんうん」

幸介にはその？イメージ？とやらがよくわからなかったが、音楽が好きな中町と広瀬が言うのだから、きっとそうなのだろう。と、幸介は一人で納得していた。

どんなイメージなんだ？ という言葉は出さずに、話の流れを守る。

「いつもそう言われる。てか、こいつには何度も言われてるよ」

そう苦笑しながら、広瀬を指差す木島。

「だってなあ……ロックとか、パンクとか……そういう激しいの聞いてそうなんだよ」

「ああ。そんな感じだよな」

広瀬の言葉に頷く中町。

そう。木島は見た目も活発そうで、中身も十分快活な人間である。ノリもいい。それで音楽好きとくれば、大体の人間はロックやパンク等の激しい曲を聞くとと思うだろう。

「もう慣れたよ」

そう言う木島の背中からは、ほんの少しだけ哀愁が漂って見えた。

「まあ、今日は4人で楽しもうぜ！」

何となく話題についていけない幸介は、期を見てそう言った。ちようど、目的地もすぐ目の前まで迫っていた。

「よっしゃ！今日は歌うぞー！」

ちよつと沈みかけていた木島が、元気良く声を張り上げた。他の3人もそれにノツて、「おー！」と腕を振り上げる。

こうして、新たな友情の始まりを祝う宴が始まった……

○—————○

その日、綾瀬遼は独り学食で昼食をとっていた。

新しい生活は既に日常と化し、誰もがそれを甘んじて受け入れている。彼女もまた、そうした大衆の中の一人である事に違いはない。ただ、彼女の場合、その日常が他人とは少し違っている。

周囲との交わりを持つとせず、また歩み寄って来た者も拒絶する。元から人を寄せ付けぬ雰囲気を持つ遼である。何度かあった彼女への接触の試みも、ひと月も経てば既になくなっていると言っても良かった。

遼自身が独りでいる事を好む為、その状況は遼にとっては好都合なのだろう。周りの人間もそれに気づき始めたのかもしれない。

（ヒトは嫌い……）

遼は、常々そう思っている。善意・悪意の有無に限らず、自分に構おうとするから。世間で言えばかなり容姿の整っている遼は、街中でもよく声をかけられる。学校のクラスメートともなれば、普段の彼女を知っている為、既に声をかける様な真似はしなくなっているが……

遼が異性から注目される事実是不変である。

（ヒトは、嫌い……）

だから、遼はそう感じる。

下心のある異性。そして、嫉妬を向ける同姓。

稀に孤独である彼女を哀れむ者もいるが、それもしばらくすればなくなる。本当に自分の事を心配しているからではなく、それが偽善だから。遼は、そう思っている。

もしも本当に心から自分の事を案じて接してくるのならば、それこそ遼自身の思考など放っておけばいいのだ。現状は彼女の望む形であり、それを良しとせずに接するのであれば、それが善意として当然の形である。というのが、遼の考えなのだ。

「ねえねえ、D組の楯岡君っていいと思わない？」

「うんうん！ 格好良いよねえ」

「あ、でも私はA組の陣内君の方が良いと思うなあ」

数人の女の子達が、どのクラスのどの男子が良いか。と、盛り上がりながら遼の前を通り過ぎて行く。

遼にとってそれはどうでもいい話題であつたし、彼女達にとって遼など知りもしない存在だ。だが、それで終わりではなかった。

遼が一瞬だけ向けた冷たい視線に、一人の女の子が気がついた――
――と言うよりも、たまたまその視線と目が合ってしまったのだ。

「ちょっとあんた」

「……………」

その視線の合った娘の性格が、遼の視線を良しとする性格でなかったのも災いとなった。

「なに？ シカト？」

「……………」

その娘の言葉に、遼は何も答えない。自分に対して投げかけられた言葉だという事には気づいているはずだ。しかし、答えようもない。

「どうしたの？」

他の少女が、突然見知らぬ生徒に突っかった友人を、多少訝しげに見ながらそう尋ねた。

「この娘が、私達を見て晒ったのよ」

「え？」

「……………」

彼女達の間には小さなどよめきが走るが、遼は変わらずに無表情のままにいる。さすがに食事の手は止めているが、それが彼女達を相手にしようという態度の顕れでない事だけは確かで、少女もまたそれを理解している。

「…………晒ってないわ。気のせいよ」

少女達全員の視線が集中する中、遼は小さくそう吐き捨てた。少女達の反応を待つ事無く、遼は止めていた手を動かし、食事を再開する。それがまた、最初に遼と視線を合わせた少女の癢に障った様だ。

「あんだねー！ 何様のつもり！？」

「……………」

答える事無く、遼は黙々と食事を続ける。

他の娘達も、そんな遼の態度にはさすがに頭にきた様だったが、実際に遼が自分達を晒ったのを見たわけでもなく、いくら友人の言った事とは言え、そこまでこだわるつもりもない様だ。

「いいじゃない、別に。それより、早く行きましょうよ」

「そうよ、時間がもつたいないじゃない」

友人達にそう言われ、最初の娘もそれ以上の追及をする気はなくなつた様だ。

「そうね……あんだ、今度私達の事晒つたら、ただじゃおかないからね」

そう吐き捨て、少女達は去つて行つた。

「……晒つてはいないけれど」

少女達の背に向けてそう呟くが、その声は彼女達には届かない。もつとも、元より届けるつもりもないだろうが。

（群れる事しか知らない……だから、ヒトは嫌い……）

遼は再び食事を再開し、数分後終える。

ゆつくりと席を立ち、食器を片付け、教室へと戻つた……

気が付かない始まり

村野幸介は困っていた。

それはとある日曜日。高校に入ってから新しく出来た友人の一人、村石悠二との待ち合わせ。その場所には一度しか足を運んだ事はなかったが、何とかなると高をくくっていたのだ。ところが……

（道に迷った……）

基本的には誰とでも仲良くなり、すぐに打ち解ける幸介だが、さすがに道行く人にそこまで親切を受けようとは思えなかった。そこには、負けず嫌いな性格も理由の一つとして含まれているのだろう。限界までは、極力ヒトの手は借りない。それが幸介の信念でもある。

（どうしたもんかな）

考えながらも、周囲を見回す幸介。記憶を探りながら、目的地までの道のりを探す。

しかし、いくら考えても答えは出てこない。

（本格的に困ってきたかな……）

と、誰かに道を聞こうかと思った時。

前方に、見知った顔の人物を見つけた。

（あれは、同じクラスの——綾瀬）

そう。幸介の視界に入ってきたのは、綾瀬遼だった。彼女は一人

で街中を歩いている。何か目的があるのだろうか、特に急いだ様子はない。

流石に年頃の男の子である幸介。女子にはそこまでアタックをかけていない。勿論、友達として、という意味でだ。女子にも声はかける様にはしているのだが、やはり男子間の様にはいけない様だ。

（まだ喋った事ないんだよな）

だが、見知らぬ人間に話しかけるより、見知った人間に声をかける方が気が楽だ。輪を広めようとする幸介でも、その気持ちは他の人と変わらない。

「おい！」

「……………」

「綾瀬さん」

幸介は意を決し、手を振りながら遼に駆け寄る。

「やつ。奇遇だね」

「……こんにちは」

「あ、えっと、こんにちは」

きちんと挨拶をされ、幸介は慌てて挨拶を返す。

「何か、よっ?」

「ああ。えっと、聞きたい事があるんだけど」

街中で突発的に会った相手に、聞きたい事があると言うのもおか
しな話だが、まあそこは幸介のご愛嬌だ。

「何？」

「桜台の、中央広場って知ってる？」

幸介のその問いに、遼は無言で頷いた。

「良かった。えっと、そこに行きたいんだけどさ……道、教えて欲
しいんだ」

「……………」

「だめ、かな？ あ、ここからの行き方を教えてくれればいいんだ
けど……………」

「……………こっち」

遼はそれだけ言うと、踵を返して歩き始めた。
着いて来い。という事なのだろう。

（連れてってくれるんだ）

遼の意外な一面を見た気がして、幸介はちよつと得した気分にな
る。

遼の何を知っている。というわけではないが、普段の様子からは
他人と関わる事を嫌っている様に思っていたのだ。もっとも、それ

は事実なのだが……

遼にしてみれば、話すのが面倒だったという事もあるのだろう。それでも、幸介にとっては十分にありがたい事で、その時から、幸介の中で綾瀬遼という人間の存在が、気になり始めていた。

「ありがとう、綾瀬さん」

「どういたしまして」

広場に着いたとたん、遼は再び身を翻し、颯爽と去って行った。

（やっぱり、何か用事でもあったのかな）

などと考えながらも、再度遼への感謝の気持ちを覚え、遼の去って行った方向に一度頭を下げた。

（ありがとう）

そう心の中で呟き、後日何かお礼をしようと決めた幸介であった。

「幸介、遅いぞ！」

「悪い……道に迷った」

村石を見つけた幸介だったが、目が合った瞬間に怒鳴られ、幸介はとりあえず謝った。

「はあ？」

「いや、実はここ、一回しか来た事なくて……」

「そういう事は先に言えよな。そしてら、待ち合わせ場所変えたのによ」

「いや、何とかなると思ったんだけど」

「それで迷惑かけてたら世話ねーよ」

「まったくもって……ホント、ごめん」

心底すまなさそうに頭を下げ、幸介はもう一度謝る。
自分が悪いと思った事は、きちんとすぐに謝る。それが、友達付き合いを続けていくコツである。

「まあいいよ。とにかく、行こうぜ。ここにいてもしょうがないし」

「おう！」

こうして、幸介は村石と共に遊び回った。

二人で遊ぶのは初めてだったが、それなりに有意義に過ごせたと、幸介は感じていた……

（これも、綾瀬さんのおかげかな）

寝る直前に、もう一度そう考え、遼に向けてお礼の言葉を紡ぐ。

「ありがとう」

と……

日曜日。

その日、綾瀬遼は街を歩いていた。太陽は高く昇り、燦々と光りを撒き散らしている。まだ春だと言うのに、まるで初夏なみの暑さだ。

遼は街を歩いているが、それに目的がないわけではない。独りを好む遼は、自然と本を読むようになっていた。最初は特に理由もなく本を読んでいただけだったが、今は読書が趣味。と、はつきりと言える程だ。

そんな遼の今日の目的は、新しい本を買う事。

桜台というこの街は、この近辺で一番賑やかな街で、欲しい物は大体この街で手に入る。

本を買う為の外出なので、勿論目的地は本屋なのだが、遼はこれといった目的地を定めずに歩いていた。

本屋も何件あるわけで、近場から回って行けばいいのだが……遼は、考えていた。どの店に入れば、欲しい物を一度の買い物で済ませられるかを。

単純に所要時間を考えるのならば、その思考は本末転倒なのだが、それだけではない様だ。いかにして荷物を少なくするか。など、いくつかの理由を元に思考を巡らせているのだろう。

「おい！」

聞き慣れた、というわけではないが、それでも何度も聞いた事のある声が聞こえてきた。遼は一瞬身を強張らせ、周囲に視線を回す。

「綾瀬さん」

今度は、はつきりと自分の名前が呼ばれた事に気付き、その声の主を探す遼。

すぐに声の主は見つかった。相手から遼に近寄ってきたのだ。声の主は、クラスメートだった。クラスのムードメーカー的存在（だと遼が思っている）の村野幸介である。

もっとも、遼は幸介の名前など覚えていないが。

「やつ。奇遇だね」

片手を挙げ、挨拶をしてくる幸介。

「……こんにちは」

クラスメートとは言え、ほとんど面識がない相手と言える幸介を相手に、遼は改まった挨拶の言葉を向ける。

「あ、えつと、こんにちは」

それに対し、律儀に挨拶をしなす幸介。遼は微かに意外そうな表情を浮かべたが、幸介は気が付かない。

「何か、よう？」

自分には幸介に話しかけられる様な覚えなどなく、そう尋ねる。決して急いでいるわけではないが、あまり他人と関わりたくないのが遼の本心である。

「ああ。えつと、聞きたい事があるんだけど」

「何？」

偶然出会ったただのクラスメートに、聞きたい事があると言う。
その突拍子なセリフに、少しだけ興味を覚える遼。

「桜台の、中央広場って知ってる？」

幸介のその問いに、遼は無言で頷いた。

「良かった。えっと、そこに行きたいんだけどさ……道、教えて欲しいんだ」

「……………」

少し落胆する。ただ、道を尋ねただけ。
そんな事は遼ではなくても良かった事である。ただ、見知った人物がいた。全く知らない相手よりはマシだろう。そんな考えで話しかけられたのなら、遼にとっては迷惑な話だった。

「だめ、かな？ あ、ここからの行き方を教えてくれればいいんだけど……………」

「……………こっち」

それでも、何となく案内をする気になった。

ろくに会話もした事がなく、まともに自己紹介をした覚えもない。
それなのに自分の事を覚えていて、街中で話しかけてきた……もし
かしたら人違いかもしれないのに、迷う事なく名前を呼んだ幸介を
……………

信じてみても、いい気がしたのだ。

広場には、それ程時間もかからずに着いた。そもそも遠い場所にいたわけではない。遼にしてみれば、あの距離で迷う方がどうかしている。とさえ思えた。

「ありがとう、綾瀬さん」

屈託のない笑顔で言う幸介。

ズキツ。と、遼の胸に痛みが走った。

理由はわからない。それでも確かに、その痛みは存在した。

「どういたしまして」

何とかそれだけ言って、遼は踵を返す。

幸介から離れれば、この痛みが消えると、そう思ったから。

幸介はまだ何か言いたそうではあったが、自分にも用事はある。

その事を思い出し、遼は足早に本屋に向かう。

どの本屋に行くか。そんな些細な思考など最早巡らせる気もなく、広場から一番近い本屋を目指した。

（はやく帰りたい）

なぜかそう思った。

本屋にも行かず、このまま帰宅するのもいいかもしれない。

そんな考えも浮かんだが、遼はそうはせず、本屋に向かった。

その日、何冊か欲しい本を探し当て、それ買つてすぐに帰宅した。

まだ太陽は沈んでいない。ただ、沈みかけてはいた。

夕陽。オレンジ色の世界が広がっている。

遼はそのオレンジ色の世界で、静かに眠りについた。

まだ痛みは残っていたが、眠れば、完全に痛みが引いてくれると、
そう思ったから。

そしてまた、翌朝には陽は昇る。その翌朝も、またその翌朝も。
それでも——遼の胸の痛みは、完全に消える事はなかった……

迷惑な恩返し

村野幸介は今日も困っていた。実に困る事の多い男である。

（綾瀬へのお礼……どうしようかな……）

それが今回の悩み事だ。先日、遼に道を案内してもらった幸介は、密かに（？）そのお礼をしようと心に決めていた。決めていたのだが……

どうお礼をすればいいのかわからないまま、既に数日が過ぎていた。

誰かに相談しようかとも思ったが、極力自分の力で解決したいのが幸介である。誰かへの相談は最後の手段に取つてある。相談しない理由には、恥ずかしいというのもあるのだろう。何せ、女の子に対して改めて何かお礼をしようなどというのは、初めての事である。ただ言葉で感謝の意を伝えるだけならまだしも……しかし、それだけでは幸介の気が済まないのだ。

「あー、どうしたもんかなー」

今は昼休みで、本来ならば遊び回っている時間なのだが、この日の幸介は違った。

教室。それも自分の机にかじりつき、その場を動かない。非常に珍しい光景である。

「おい、村野ー」

「んー。あ、高坂か」

幸介は自分に声をかけてきた人物を見て、そう呟いた。

高坂准。中学からの友人の一人で、今回もクラスメートである。

「あ、高坂か。じゃない」

「あー、悪い。で、どした？」

「おー。今日の放課後、暇あるか？」

「まあ、一応」

本当ならお礼を考えたいところだが、肉体的には暇である事に変わりはない。

「みんなでサッカーするんだけど、お前もどうだ？」

「サッカーかあ」

「何だよ、いつもは率先して参加するくせに……やけに消極的だな？」

「まあ、俺にも色々とあるのですよ」

「そつか。で、どうするんだ？」

ガクツ。とうなだれる幸介。

（俺の渾身のギャグが……）

どうにもギャグセンスのない幸介であった。

「悪い。今日はパスさせてくれ」

「そっか。わかった。まあ、何だか知らないけど元気出せよな」

「おう。サンキュー」

キンコン・ンカーンコーン

そんな会話をしているうちに、どうやら昼休みが終わったらしく、チャイムがなり響いた。

「ん。昼休み終わったな」

「だな」

「それじゃあ、俺戻るわ」

「おう」

自分の席に戻る高坂の背中を見送り、幸介は再び思考を巡らせる。慣れない作業のせいか、だいぶ疲れてきている様だが……

（結論を出さないと、どうにも気になってダメなんだよな）

難儀な性格だ。

「ああ、そっか」

ふと、幸介はある事に思い当たった。

「直接聞けばいいんじゃない」

素晴らしく単純な答えだった。

しかし、幸介にとってはかなりの名案に思えてならなかった。

（今日の放課後、さっそく聞いてみるか）

そう意を決し、午後の授業に向けて身を引き締める事にした……

○

とある日の放課後。生徒達は各々に散っていた。部活に行く者、帰宅する者、教室で話をする者、そして、ただぼろっとしていない者。

そんな中、綾瀬遼は教室で何をするわけでもなく、ぼろっとしていた。普段はすぐに帰宅する遼だが、稀にこうして教室に残っている事がある。

「……………」

ただ自分の席に座ったまま、窓越しに外を眺める遼。その姿はどこか憂いを帯びていて、神秘的な雰囲気さえ感じさせる。教室内に残った生徒達による喧騒さえなければ、の話だが……

「綾瀬さん。ちょっといいかな？」

と、声をかけてくる人物がいた。

遼はその声に聞き覚えがあり、胸の鼓動が高鳴るのを感じた。

「……………何？」

遼が振り返った先にいたのは、村野幸介。クラスメートで、つい最近始めて言葉を交わした相手。

「この前のお礼がしたいんだけどさ、正直どうすればいいかわからなくて……………何か、して欲しい事とか、もしくは欲しい物とかある？」

この前のお礼。それが先日のだ案内の事だと瞬時に理解した遼は、少しだけ驚いた。

「そんなの、いいのに」

「でも、やっぱり何か形として残したいじゃん。まあ、物じゃなくてもいいんだけど。行動なら行動として、しっかりとさ。言葉だけの感謝じゃ、俺の気がすまないんだ」

それはある意味自分本位の考え方ではあるが、きちんとお礼がしたいという事なのだから、悪い事ではない。

「特にないから……………そんなに、気にしないで」

少し昔までの遼だったら、「なら、もう私に話しかけないで」くらいは言っていたかもしれない。それは、遼にとって意識した返事ではなかったが、確かに訪れた変化ではあった。

「そう言わずにさ、何かあるだろ？」

しつこい幸介に、遼は困惑していた。いつもならただ辟易とするだけなのに、幸介が相手だと、自分の感情をうまくコントロール出来ない。そんな感覚に囚われている。

「ああ、そうか……急に言われても困るか……」

そんな答えに達した幸介が、思案する様に頭を傾ける。
遼は、少しだけほっとした。

「そうだ。ならさ、別に今答えてくれとは言わないよ」

「え？」

「いつでもいい。何か欲しい物が出来たりしたら、俺に言ってくれよ」

笑顔で言う幸介。

その笑顔を見たたん、遼の心臓が大きく脈打った。
鼓動の間隔が狭まり、幸介の顔をまともに見る事さえ出来なくなる。

「どう、かな？」

俯く遼を見て不安になったのか、心配そうにそう尋ねる幸介。

「……わかったわ。それじゃあ、何か思いついたら言うから」

「おう！」

「それじゃあ、またね」

満足そうに頷く幸介を横目に、遼は鞆を持って立ち上がる。
帰り支度を済ませていた事に安堵を覚えながら、遼は教室から走
って出て行く。その慌てた様子に幸介は何も反応出来なかった様だ
が、遼にとってはありがたかった。

（あの人の声を聞きたくない）

そう思ったから。

まるで、自分が自分じゃなくなる様な、そんな感覚に陥るから。
遼は、幸介のそばにいたくなかった。

そこで初めて気がつく。もう声をかけるな。ただ一言、そう言え
ば良かったという事に。そして、どうしてそう言わなかったのか、
疑問を感じてしまった。

その時、遼は自分に起こった変化に混乱してしまった。どうすれ
ばいいのかわからず、とにかく走った。靴を履き替え、自宅まで、
ずっと。

（今日はすぐ寝よう）

そう心に決めて、とにかく走った……

そして始まる物語

キンコンカンコン

昼休みを告げるチャイムが鳴った。一瞬にして教室内は騒然とし始め、4時限目の担当講師は早々に授業を切り上げ教室を出て行った。

（飯か……どうしようかな）

幸介は普段弁当持参なのだが、今日はいつも作ってくれる母親から買って食べると言いつかっていた。お金も渡されているが、まだどうするか決めていない。

「村野、飯食おうぜ」

その声をかけてきたのは、同じ弁当組の木島だった。

「悪い。今日は弁当じゃないんだ」

「そうなのか？ で、どうするつもりなんだよ？」

「まあ、学食が購買くらいしか手はないんだけど……」

「どっちにするにしても、急いだ方がいいぞ。どっちも、この時間は戦場らしいからな。俺は行った事ないから知らないけど」

などと、少しばかり怖い事を言う木島。

「よし。それじゃあ、学食に行くよ」

「そうか。ま、席残ってるといいな？」

「そうだな」

そう応えて手を振り、幸介は木島と別れ教室を後にした。

「うつ……」

学食内の様子を見た幸介は思わず呻き声をあげてしまった。
その混雑っぷりは、いつそ昼飯を諦めた方がいいんじゃないかと、
一瞬本気で思う程だ。

「どうしたもんかなあ」

呟くが、それだけで事態が好転するわけがない。と、周囲を見渡
していた幸介の目に、一つだけだが空席が映った。

（チャンス！）

戦場。そうこの場を言い表していた木島の言葉を思い出し、幸介
はすぐにその空席を目指す。

急いだかいがあつてか、他の人にとられる事なくその席に辿り着
いた。

軽く息を吐いて、席に自分の荷物を置く。

「あ」

と、向かいの席からそんな声が聞こえてきた。
疑問に思い、今さらながら向かいの席へと視線を向ける。

「あ」

そして、幸介も同じような声をあげた。そこには、遼が座っていたのだ。

「綾瀬さん」

「……何？」

「あ、えっと……ごめん。席、見ててもらってもいいかな？」

言葉に詰まる幸介だったが、自分がこれから昼食を買わねばならぬ事を思い出し、そう切り出した。

「ええ」

「ありがとう。じゃあ、よろしく」

そう言つて、幸介は券売機へと向かった。

ここの学食のシステムは、券売機にて欲しい商品の券を購入し、それと引き換えにして商品を受け取るというものだ。学食を始めて利用する幸介だったが、それは周りの人間を見てすぐに理解出来ていた。

カツカレーを購入した幸介は、モノを手に入れすぐに席に戻った。

「お待たせ」

「いいえ」

一言そう言葉を交わし、幸介は席に着く。「いただきます」と小さく言い、さっそく手をつける。

（なかなか悪くはないな）

学食のカレーにそんな評価を下しながら、向かいにいる遼に目を向ける。

「そう言えば、綾瀬さんは学食だったんだ？」

「ええ」

「……、結構おいしい？」

「……不味くはないと思うけど。値段もそんなに高いわけじゃないから、私は嫌いじゃないわ」

普段よりも饒舌になっている。遼は自身でそう理解していたが、それが胸の痛みを紛らわす為の行為である事に気付いていなかった。なぜこうまで口を走らせるのかわからず、多少ながら困惑している。

「そっか。俺はいつもは弁当なんだけど、今日はちょっと理由があって用意してもらえなくてさ」

「……………」

「ああ。いつも母さんが作ってくれるんだ」

苦笑しながらそう付け加える幸介。

「いいお母さんね」

「まあ、そうなのかな。あんまりそういう風に考えた事はないけど」

「いいお母さんよ」

「……うん。そうだな」

少し考えてから、しかししっかりと頷く。

「……それじゃあ、お先に」

自分の食事を終えた遼が、そう言って席を立った。

「おう」

幸介が応えると、遼は心なしか嬉しそうに去って行った。もつとも、幸介はそんな些細な変化に気がつきもしなかったが。

幸介も自分の昼食を片付ける事に専念し、止まっていた手を動かし始めた。

気付いた想い

綾瀬遼は、一人暮らしをしている。中学に上がった頃から、事実上はずっと。一つの部屋に、押し込められる様な形で。

遼が一人暮らしをしている事を知っている生徒はいない。遼は誰にも話さず、学校側もそれを誰かに言う様な真似はしないからだ。そういう点で、遼は？学校？というシステムを信頼していた。

遼が一人で暮らしているのには、勿論理由がある。家庭の事情と云ってしまえば、それで済んでしまうのだが……そこには、少々深く、重い理由があった。

遼が小学校を卒業する間近の事である。その何年か前から不仲だった遼の両親は、その年に離婚した。父親は仕事一筋な人間で、母親は元より子供があまり好きではない様だった。

両親共に、あまり遼に干渉しなかったのだ。虐待があったわけではない。しかし、必要最低限の会話しか交わさない。遼自身が、娘の存在など邪魔なモノとさえ見えられていた気がしていた。

親とも話す事のなかった遼は、どんどん内向的に育っていった。そして訪れる、両親の破局。口論される親権問題。その口論が、どちらが娘を引き取るか。というものではなく、どちらに娘を押し付けるか。という内容でさえなければ、まだ遼は現在の様にはなっていなかったのかもしれない。それ程、酷いモノだったのだ。

結果。遼は父親に引き取られる事になった。会社ではそれなりに優秀で、稼ぎも十分にあった為、養育が母親よりも適していると判断されたからだ。

誰に——それは、父親の会社が抱えている弁護士に、だ。裁判になりかけた為、父親が意見を尋ねた結果であった。自分で声をかけ

た手前、それを否定する事も出来ず、父親は自分が遼を引き取る事に同意した。そもそも、父親は遼を嫌っているわけではなく、子育てを煩わしいと思っただけなのだ。

そして、遼の卒業。中学校への入学。それと同時に、父親は遼への自立を求めた。

父娘の干渉は本当に必要最低限の事を抜き一切なし。金銭面で、遼が困る事はなかった。金はやる。だから勝手に生活しろ。それが、父親のスタイルだったのだ。

遼の心は蝕まれ、内向的な性格は、歪んだモノに変わっていった。他人を信用する事がなくなり、常に独りを好む様になった。親友とは呼べなくても、小学生時代にいた数少ない友人達でさえも、遼は信用出来なくなり、自分から遠ざけた。自分の中に殻を作り、周囲と自分を隔絶させる術を覚え、やがて周囲からも遼には関わらない様になってきた。

そうして過ごした三年間。そして、高校への入学。それと同時に、父親は遼に部屋を与えた。自宅ではなく、高校の近くに、アパートの一室を借りてそこに住めと言ったのだ。遼はそれに従い、本当の一人暮らしを始めた。

どうでも良い存在から、邪魔な存在へと変わったのだらう。遼は、父親の女遊びに気付いていた為、その変化も理解した。

仕事一筋の父親が、たまの息抜きなのか行う女遊び。それは昔から続いている事で、遼はまたかと思ったただけだ。

家を出て行け。と言われ、むしろありがたかったくらいである。部屋は用意されたものではあるが、父親と同じ屋根の下ではなくなったと思うと、清々しい気分になれた。

そして始まった高校生活。これから先も、今までと変わらない日常が続いていくと思っていた。それなのに、変化は訪れてしまった。

遼の安息はなくなり、目まぐるしい感情の変化に追いつけていなかった。

（村野幸介……）

ふと、その名前が頭に浮かんだ。

久しく、覚えようとしなかった他人の名前。いつの間にか、自然に覚えていた。

幸介の事を考えると、胸が痛くなる。感情のコントロールが効かなくなる。

その感情が何なのか、遼はわからなかった。しかし、幸介が遼にとって、他のどうでも良い人間とは違う。特別な相手であると、遼は気がついた。

（村野、幸介）

もう一度、心の中でその名前を呼ぶ。

なぜか、少しだけ幸せな気分になれた。その幸せな気分のまま、遼は眠りに着いた。そして――

その日、遼は幸介の夢を見た……

○

どうして、こうも綾瀬 遼という少女の事が気にかかるのか、幸介は全くわからなかった。勿論、今までもこうして輪を広めてきた事に変わりはなく、自分の殻に閉じこもっている節のある遼が気にかかるのも不思議ではない。不思議ではないのだが、その感情は今までのモノとは明らかに違っていたのだ。

だから、幸介は悩んでいた。自分の胸に燦る感情の正体がわからずに、多少いらついていたのかもしれない。

幸介にしては珍しく、他人に対する態度にそれが顕れていた。口調がきつくなったり、物にあたる事も少しはあった。そして、その行為で我に返り、幸介は自責の念に苛まれる。

（何してるんだ、俺……）

どう考えても、原因は遼にある。それはわかっているのだが、遼の責任というわけでもない。それもわかっている。だから結局は、自分が悪いという事になる。幸介は必死で考えるが、導かれる結果は何度やっても変わる事はなかった。

「ただいまー」

鍵を開け、自宅に入る。鍵が閉まっていたのだから、誰もいない事はわかっていた。

幸介の家は、母子家庭だ。それも、母一人子一人の家庭である。まだ幸介が小学校に入る前の事である。幼い幸介と幸介の母を置いて、父親は家を出て行った。それから一度たりとも連絡など入った事もない。

幸介は父の背を知らず、働く母の背を見て育ったのだ。

片親の子供が味わう寂しさ、悲しさ、そして辛さ……多くの嫌な記憶に押しつぶされそうになりながらも、だからこそ人の輪を大切に思う人間に育った。母親の育て方も良かったのだろう。

幸介は自分の他に誰もいない家の中を歩く。

足音だけが響き、少し寂しさを覚えるが、それも今となっては慣れたものだった。

用意されていた夕食を温め、一人で食べる。時間は少し早い、自分で後片付けをする事を考えると、すぐに食べてしまった方がよい。時間が経つと、それが面倒になってくる。少しでも、遅くまで働いている母親の苦労を和らげる為に、自分で出来る事は極力しよ

うと心がけている。

それは、母親が大切な存在だから。たった一人の肉親。今まで自分を育ててくれた女性。

そして、幸介は気付いた。

自分が遠に対して抱いている感情が、母親に対して抱いている感情と似通っているという事に。それに勿論差異はあるが、近い感情だという事に。

（俺は、綾瀬の事を大切にしたいと思ってる……？）

確信はなかった。しかし、それ以外の説明は出来ない。

幸介が、それが人を「好き」になるという感情だという事に気がつくのは、もう少し先の事になる……

ある日の光景

「最近さ」

とある日の放課後。高坂はふと呟いた。一緒にいた数人の男子生徒が、ほぼ同時に高坂に目を向ける。

「村野、付き合い悪くなったよな」

中には最近という言葉にうまく領けない者もいたが、幸介の付き合いが悪くなってきたのは事実で、中学からの付き合いがある高坂などは、特にそれを顕著に感じているのだろう。

「そうだな……何か、元気ない様にも見えるし」

とは、中町の言葉。

「木島達もそう思うだろ？」

「うーん……そうだな。まあ、そう感じる事はあるかな」

「俺も」

中町の言葉に頷く木島と広瀬。

「そこまで付き合い長くないからな。そういう時もあるかなって感じではあったけど……お前らがそう言うなら、そうなのかもな」

「村石も感じてはいたんだな」

「ああ」

集まった者全員が、結局は幸介の変化を感じ取っていたという事だ。

「何かあったのかな？」

「……多分」

一瞬沈黙する一同。

「……もしかして」

ゴクリ。

高坂が言いかけると、全員が息を呑んだ。

「恋でもしてるんじゃないか？」

「ま、まさか……」

「そんなキャラじゃないって」

「だよな？」

皆から高坂の言葉が否定だれる。結構酷い扱いだ。

「でも、もしかしたらさ……」

「……………」

どうやら高坂は、幸介恋愛説を押したいらしい。

その言葉に、一同も何となくそうではないか、と思えてくる。

「少し、探りを入れてみよう」

「任せたぞ、高坂」

「え？ 俺がかよ？」

「頼んだぞ。言いだしっぺ」

「くっ……わかった。やってみる」

「ま、俺達も協力はするさ」

と、一致団結(?)し、一同はその日は解散する事になった。

○

「最近さ」

とある日の放課後。数人の女子が集まり、談笑にいそしんでいた。そんな中、一人の少女がふと呟いた。

「綾瀬さん。ちょっと変わったよね？」

「あ、うんうん。あたしも思ってた」

「話しかけたら、ちゃんと返事もしてくれまし。相変わらず、無愛想ではあつたけど」

「何か、ようやく打ち解けてきたつて感じかな？」

「どうなんだろうねえ……」

こんな会話をしているのは、皆遼とは中学の違つ者達だ。

彼女達は知らない。この遼の変化が、どれだけ奇異な事であるかを。彼女達は知らない。この遼の変化が、幸介の存在によるモノだという事を。

「何か、あつたのかな？」

「つて言うか、何かあつたと思えないでしょ？」

「あ、それもそうか」

「やっぱり、女を変えるつて言つたら……恋？」

ポカッ。

「いたい……」

「いたい……じゃないわよ。あんたの頭、単純すぎ」

「でも、あたしはそうだと思つただけだなあ」

「何にせよ、良い変化だと思うわよ」

「そうだねえ」

それで、遼についての会話は終わりだった。また違う話に花を咲かせ、彼女達はしばらく談笑を続けた。

始まりと綻び

自分の感情がわからなかった。

ただ胸が苦しくて、どうすればいいのかわからなくて――

「……………」

登校。それはほぼ毎朝行う日課の様なもの。

その日も学生の本分を行う為に、遼は学校に向かっていった。いまいち存在感の薄い遼だが、実は小学生時代からずっと皆勤だったりする。

いつも通り、何ら変わりなく歩く遼。それは外見だけで、その内にある感情は激しく渦を巻いている。

「綾瀬さん、おはよう」

後ろから駆け寄ってきたクラスの女子が、遼に声をかけてきた。少し前までなら、こんな事はなかった。

「おはよう」

そして、遼がこう返す事も、今までならなかった事だ。返事をもらった女子生徒は、笑顔を浮かべ遼の隣りにつく。

「一緒にいいかな？」

「……………」

遼は声に出して答えはしなかったが、無言で頷いた。

「綾瀬さんってさ、無口だよね。あ、別に悪口言ってるわけじゃないよ。ただ、あんまり喋らないから」

「……そうかも」

遼自身、お喋りな人間だとは思っていない。確かに無駄に口を開く事はないし、自分は無口なのだろうと理解出来る。

「実は……あたし、綾瀬さんってあたし達の事嫌いなのかと思ってたんだ」

「……………」

「でも、最近はそうでもないかなって思ってる」

「どうして?」

「どうしてって聞かれても困るんだけど……話してくれる様になつたし。今は、人見知り激しいのかな、くらいに思ってるけど……違う、かな?」

おそろおそろ、といった風に、その少女は遼に尋ねる。

「人見知りが激しいわけじゃないけど……でも、あんまり人というのは好きじゃないわ」

「ふーん、そっか……でも、絶対に嫌ってわけじゃないんでしょ?」

「……………」

「綾瀬さん」

「何？」

「あたし達、友達でいい？」

「……唐突ね」

突然の言葉に、遼は驚きを隠せず目を丸くさせた。

「うーん。こういうのって、勢いが大事だと思わない？」

「そんなもののなの？」

「そんなものよ。多分」

「多分って……」

「少なくとも、あたしにとってはね」

「……そう」

多少呆れながらも、遼はこの少女に概ね好感を抱いていた。
今、自ら閉ざして心の扉が、ほんの少しだけ開いた気がした。

「それで、友達でいいかな？」

「……それも、いいかもね」

ふと、小さく笑みを浮かべる。

自分に訪れた変化も、そんなに悪くはないと思えてきた。

「それじゃあ改めて、あたしは霧島優子。名前、覚えててくれた？」

「ええ」

「良かった。それじゃあ、よろしくねっ」

「こちらこそ、よろしく」

こうして、一つの友情が生まれた。

遼にとってはとても久しく、そしてある意味初めてとも言える友情。

遼の目から見える世界が、色を変えた瞬間だった……

○

「時に村野君」

「どうしたんだ？ 改まって。って言うか、何か変だぞ？」

授業と授業の間、わずか10分の休憩時間に、高坂に呼ばれた幸介はそう応えた。

「失敬な」

「って、だから変だって」

「気にすんな。それより、聞きたい事がある」

いつも通りの口調に戻し、高坂は早速本題に入ろうとする。与えられた時間が少ないのだから、まあそれも当然かもしれない。

「何だよ？」

「お前、好きな娘はいるか？」

「は？」

あまりに唐突な質問に、幸介はすつとんきょうな声を上げてしまった。

「だから、好きな娘はいるのか？　って聞いてるんだよ」

もう一度同じ事を言う高坂。その様子を廊下から隠れる様に見ていた木島・広瀬・中町・村石の4人が、呆れ混じりに息を吐いていた。

（ストレート過ぎだろ！）

（でも時間ないしなあ）

（だからって、やっぱ今のはないと思う……）

小声でぼそぼそ話し合う4人。傍から見れば奇妙な4人だが、まあそこは高校という場所の特異性からか、誰も気に留めた様子もない。

(しっ。村野が立ち直ったぞ)

木島のその言葉で、全員が再び教室内に意識を向ける。

「何を言っただ、いきなり」

「気にすんな。特に意味は無い。で、どうなんだ？」

「……いないよ」

少し考えて、幸介はそう結論付けた。

「本当か？」

「嘘言っでどうするんだよ……」

「それもそうだな。わかった。じゃあな」

そう言っで踵を返し、高坂は廊下にいる4人の元へ向かう。

「何だったんだ？」

そんな高坂の背を見つめ、幸介は首を傾げるしかなかった。

「お前はバカか？」

開口一番。高坂は村石のそんな言葉に出迎えられた。

「ひどつ。それが奮闘してきた友人にかけ言葉か？」

「うるさいつ。ストレート過ぎなんだよ」

「いや、あいつ鈍感だから、あれくらいじゃないと求める答えが返ってこないんだよ」

「だからって限度があるだろ」

幸介が鈍感だという部分は、誰も否定しない。

「だから、あれくらいじゃなきゃダメ何だって。な、中町？」

「ん？ まあ、そうかも」

そこは中学からの付き合いである高坂と中町。村石や広瀬よりも、幸介の事を理解しているのだろう。

「そこまで言うなら、さっきの答えの真意もわかったんだろうな？」

「勿論。多分、誰か気になる娘がいるはずだ」

「そんなんわかるのか？」

と、口を挟む広瀬。

「ああ。もし本当に誰も思い当たる娘がいなかったら、あいつなら即答してたはずだ。それに、あんな普通に返事するだけってのもおかしい。笑い飛ばして、俺をどつくくらいの事はしてもおかしくない」

「……………」

「……………」

高坂の読みに、思わず口を噤んでしまう一同。

「まあ、もう少し様子見てみようぜ？」

「そうだな」

高坂の言葉に頷く村石。他の面子も黙って頷く。

一見解決したかの様に見えるが、そこには確かな確執が残った。

高坂はあまり気に留めていない様だが、村石は、そこに3年という月日が隔てる差を、確かに感じていたのだ。

幸介は知らない。

自分の知らないところで、一つの友情に綻びが出来てしまった事を。

気付くはずもない。それはほんの小さな、まだ視線も通らない程の穴だったのだから……

変化は成るままに

「それでね、これからボーリングに行くんだけど……綾瀬さんもうかな？」

放課後。クラスメートの川原佳乃にそう聞かれ、遼は困惑していた。

誰かに遊びに誘われた事に。そして、ボーリングというその内容に。それが唐突だったのだからなおさらだ。

「もちろん行くよね？」

遼が答えるよりも早く、優子がまるで決め付けるかの様に言った。彼女の中では、基本的に遊びの誘いを断るという選択肢がない様だ。

「優子っ」

そんな優子を咎める様に、佳乃は優子の名前を呼ぶ。

「あ、気にしないでいいからね。用事があるかもしれないし。ただ、あたし達も綾瀬さんと仲良くなりたいたいし、もし暇だったらでいいんだけど」

「特に用事はないけど……いいの？」

自分が一緒にいいのか。遼はそれが気にかかり、佳乃にそう尋ねた。

「いいの、いいの。さつきも言ったけど、あたし達綾瀬さんと仲良くなりたいから」

「……ありがとう」

慣れぬ言葉、そして態度に、遼は照れながら俯く。

「えっと、メンバーなんだけど……あたしと優子。それと、A組の早野さんと西田さんなんだけど……平気？」

「ええ」

A組の二人とは面識のない遼だったが、優子と佳乃と一緒になら、自分も普通の女の子の様になれる気がした。

○

「えっと、自己紹介からしょうか」

そう切り出したのは、何気に仕切り屋の佳乃だ。

既に一行はボーリング場に到着しており、準備を終えている。

「皆知ってると思うけど、あたしは川原佳乃。身長は160。体重は秘密」

「そんなデータはいらないわよっ」

ボケ始めた佳乃にツツコミを入れたのは、満面笑顔の優子だ。

「あ、あたしは霧島優子。好きな事は楽しい事。嫌いな事は哀しい事です」

そう言つて、二人のノリについてこれていない遼にタッチする。

「？」

「今度は遼の番だよ」

「え、えっと……綾瀬遼です。趣味は読書。あと、ぼおーっと空を眺める事、かな」

慎重に言葉を選びながら、遼は何とか自己紹介を済ませる。

「読書は、まあイメージ通りだけど……」

「ぼおーっと空を眺める、かぁ……何か、意外な感じ」

A組の二人が、見た目、噂から察する遼のイメージとの違いを感じてそんな事を言う。

「いいから。あんた達の番よ」

「はい。あたしは早野聡美。よろしくねっ」

「で、私は西田陽子。よろしく」

優子に似て活発そうな聡美と、眼鏡をかけた一見おとなしそうな陽子。

この数日の間に、4人もの友人が出来た事を、遼は嬉しく思った。少し前までなら、そんな事は思わなかっただろう。友人などいない。自分は独りが好きなのだから。と、それだけで終わっていたはずだ。

自分の感情の変化に苦笑を漏らしながらも、どこかに納得する部分もあった。

自分を襲った不幸。それを人に話した事はないし、それを不幸と実際に感じた事はなかったが、他人を信用出来なくなっていたのは確かだ。それなのに、今こうして友人が出来た事に喜びを感じている。

それは、自分がどこかで求めていたからだと理解出来た。

それは明確な答えではないけれど、小さな喜びである事だけは確かだった。

「さ、それじゃあ始めようか？」

「そうね」

こうして、5人でボーリングを始めた。

遼はボーリングは始めてだったが、それは楽しくて、とても有意義な時間を過ごせた気がした。

少しずつ、それでも確かに、遼は変わりつつある。

そして気がつく。想いは膨らんでゆく。

いつしか、心の殻を破り、外に出てくるまでに……

空がオレンジ色に染まっている。

夕焼け空を眺めながら、幸介は一人帰路を進んでいる。

（好きな娘、か……）

休憩時間に問われた質問を思い出し、幸介は考える。

問われたその時は、いらないと思いそう答えた。だけど、どうしても何かが引つかかるのだ。自分の中の何かが、「違う！」と叫んでいる気がしてならないのだ。

思考を巡らせても、直ぐには答えが出ない。今までに恋愛経験などない幸介である。ただでさえ鈍感なのだから、それも当然と言える。

そして、ふと一人の少女の顔が浮かんだ。一度浮かんだその顔は消えず、幸介の頭の中に焼きついた様に離れない。

（綾瀬……？）

浮かんできた少女の名前を心の中で呟く。すると、次第に自分の気持ちが高ぶって来るのを感じた。

（あれ？ 何だろう……綾瀬の事考えると、胸が熱くなってくる……）

考えれば考える程に、胸の高鳴りが激しさを増す。

（俺、どうかしたのかな？）

自分の身に何が起こったのか理解出来ず、幸介はただ困惑するばかりだ。

ふと、高坂の言葉が蘇る。

（「お前、好きな娘はいるか？」）

（「……いないよ」）

少し考えてから、幸介は確かにそう答えた。

（「本当か？」）

なぜか、高坂にしてはしつこく聞いてきたな。と、その時幸介は思ったのだが……

（あいつなりに、何か思う事があったのかもしれない）

そして、それは正しかった。

（俺は、綾瀬の事が好きなのかもしれない。少なくとも、気にかけてる）

気がついた感情は止まらず、加速してゆく。

訪れた変化に抗う事は出来ず、受け入れしかない。もっとも、抗う必要など幸介は感じていないが。

始まりはほんの些細な出来事だった。

お礼がしたい。その気持ちには、きっと遼との関係をそこで終わらせたくなかったから、自然とそう感じたのだろう。

加速する想いは、留まる事を知らない。

綾瀬と話したい。

綾瀬の事をもっと知りたい。

綾瀬と、触れ合いたい。

そうした感情がいつきに押し寄せ、幸介の感情は昂ぶり続ける。

（会いたい。会って、話したい！）

直ぐにでも伝えたい気持ち。

また、それが出来ないもどかしさ。

幸介は何かに不安を感じつつも、初めての恋に振り回されている。そして、それを心地良いとさえ感じている。

訪れた変化は大きく、その手綱を上手く操る事は出来ないが、幸介はそれでもいいと思った。

ただその時は、「綾瀬に会いたい」という念で、頭が一杯になっていた……

二人の気持ち

ボーリングを終えた遼達は、その日はそのまま解散という事になった。

その帰り道を、遼は優子と二人で歩いていた。

「ねえ、優子」

「ん？ 何なの？」

少しだけ沈黙が続いたと思うと、珍しい事に遼から話を切り出した。

「優子は、どうして私に声をかけようと思ったの？」

それは、ずっと遼が感じていた疑問。

「気になったから」

優子は笑顔で即答する。

「気になったからって……それだけ？」

「うん。前から、声はかけたかったんだけど……ほら、何かそんな雰囲気じゃなかったし。でも、この前から雰囲気が変わって、声かけやすそうになったから」

「勢いが大事？」

「そつ。勢いが大事」

そう言つて、苦笑しあう遼と優子。

遼は先に今の質問をしたが、他に聞きたい事があつた。

それは、今の自分の中にある気持ち。

それが一体何なのか、遼は誰かに教えてもらいたかつた。
ただ一つ。可能性のあるものを聞く事にする。

「優子は——恋つて、した事ある？」

「あたし？ あたしはないなあ。ほら、こういう性格だし。男子とも、友達つて感覚でしか付き合えないんだよね。ちよつと、寂しかったりもするんだけど」

そう言つて苦笑する優子。

「なになにつ？ もしかして、遼好きな人いるの？」

「——わからない」

それが、遼の正直な気持ちだつた。今まで恋などした事のない遼にとつて、今の気持ちは未知のものなのだから。

「わからないつて……」

「でも、気になる人はいるの。彼の事を考えると、彼と顔を合わせると、彼と話をする、胸が苦しくなるの……」

「それつて、恋じゃないの？」

「やっぱり、そうなのかな……?」

いまいち自信の持てない遼。

「あたしも恋愛経験ないから、はっきりと言えるわけじゃないけど……でも、それは恋だと思うよ?」

「……………」

だんだんと、遼もそんな気がしてくる。

自分が恋をしている。そう考えると、なぜだかおかしくなってきた。

他人を疎ましく思い、常に独りであろうとしていたはずなのに……たった一人の少年の存在によって、今こうして友人をも作っている。

自分に訪れた変化を、自然と受け入れている。

(村野幸介)

「で、誰なの?」

心の中でその名を呟いた刹那に問われ、遼はドキリとする。

「ここまで言っただから、モチロン教えてくれるんだよね?」

「……言わなきゃ、ダメかしら?」

「ダメ」

「……………」

正直、遼としてはあまり言いたくなかったのだが……

「村野幸介」

フルネームで言う。

ふと、自分がフルネームでしか幸介の名を言った事がない事に気がついた。それもまた、おかしく思える。

「村野君かあ……そう言えば、結構話とかしてたよね。どっちかって言くと、村野君から話しかけてたって感じだったけど……そっかあ。遼、村野君の事好きなんだあ」

「ちょっと優子。あんまり口に出さないでよ……」

「だって、今の遼があるのって、村野君のおかげでしょ？」

「！」

図星をつかれ、遼は一步下がってしまった。

「村野君が話しかける様になってからだもん。遼の雰囲気が変わったのって」

「……………」

「村野君の存在は偉大だね」

「優子？」

少しだけ睨みつける様にし、優子の名を呼ぶ遼。

「ごめん、ごめん。でも、本当にそうだよ。あたし達も、村野君には感謝しないと。村野君のおかげで、遼と仲良くなれたんだから」

「優子……」

「あ、噂をすれば」

「え!？」

優子の言葉に、思わず声をあげ、その視線を追う遼。
空はオレンジ色に染まっている。

沈みかけた夕陽の見守る中、遼の視線の先には幸介がいる。

二人の視線は絡み合い、どちらからもそれを離そうとはしない。

「お邪魔虫は消えますかね。じゃね、遼」

そう言っ、優子はスキップ混じりにその場を離れていった。
その声は聞こえていた。しかし、遼はそれに応える事が出来なかった。

胸の鼓動は高鳴り、幸介の事しか見えていない。まるで、世界に二人しか存在していないかの様な錯覚。

やがて、音さえも世界から消え、本当に二人だけになってしまうかの様な錯覚。

遼は、これが恋なのかなあ。

なんて、頭の隅で考えていた。

こんなにも胸は逸っているのに、変に頭は冷静だ。

「綾瀬」

「村野君」

オレンジ色の空を背に、二人の声が重なった。
それはほんの偶然だった。

声が重なった事だけではなくて、二人が出会った事。二人が、同じ気持ちでいた事。

“ 会いたい ”

その想いが、二人を巡り合わせたかの様に……

「
……………」

二人共、何を言っているのかわからずにいる。その沈黙すら、気まずいものではなく、どこか柔らかな雰囲気を持っているかの様だ。それでも、時は緩やかに過ぎていく。

「村野君」

遼が先に声を出す。幸介としては、ちょっと悔しい気持ちもあった。男として、先に声をかけるべきだった、と。

（見惚れてた、何て言い訳にもならないしな）

と、内心苦笑する幸介。

「な、何かな？」

少しだけ上ずった声で、幸介はそう聞き返した。

ついさっきまで高まっていた気分は、遼と顔を合わせた途端に収まっていた。とは言っても、胸の鼓動はより一層その速さを増しているが。

「……えっと、何でもない」

俯いて、呟く様に言う遼。

遼自身、そんな自分を罵りたくなっていた。

なぜ、何も言えないのか。否、その理由はわかっていた。

（怖いんだ……）

自分の気持ち、そして自分という存在そのものが、気持ちをぶつける事によって拒絶されてしまう事が……

拒絶されると決まっているわけではない。それでも、答えがわからない以上、拒絶される可能性だってある。だから、遼は不安を感じずにはいられない。

また、その事によって幸介も不安を覚えていた。

遼の反応をどう受け止めていいのか、幸介には全くわからなかったからだ。

そしてそれ以上に、自分の気持ちをぶつける事に、いざとなって臆してしまっている。

（俺って、ダメな奴だな……）

このままでは何も始まらない。それはわかっているのに、どちらも動く事が出来ない。二人共もどかしさを覚え、そして……

『あの』

再び、二人の声が重なった。

数瞬の沈黙。やがて、二人の口から苦笑が漏れる。

「えっと、綾瀬からいいよ」

「ううん。村野君から」

「そうか？ それじゃあ、遠慮なく」

何かが吹っ切れた幸介は、少しでも早く自分の想いを伝えたかった。だから、遼が何か言おうとしていたとしても、その後に聞けばいいと思った。もしかしたら、それを聞く事はなくなってしまっても……

「俺、綾瀬の事が好きみたいなんだ。こんな気持ち始めてだから、本当に好きなのかどうかわからないんだけど……でも、綾瀬の事、大切にしてやりたいって、守ってやりたいって思う」

告白としてはあまり良いものとは呼べないかもしれないが、それでも、それが幸介の正直な気持ちだった。

自分の気持ちを真っ直ぐにぶつけるくらいしか、幸介には出来なかったから。

「――」

「綾瀬？」

「嬉しい……」

「え？」

「私も、多分村野君の事が好き」

幸介の耳には、遼の声以外の全てが入ってこなくなっていた。全ての神経が遼に向き、遼だけを感じている。

「私も、こんな気持ちになったの初めてだから、絶対とは言えないでも——村野君の事を考えると、胸が苦しくなるの。村野君の事しか、考えられなくなる。それに——今、村野君に好きって言ってもらえて、すごく嬉しかった。だから、この気持ちは本物だと思う」

「綾瀬」

幸介は、再び遼の名を呼ぶ。

二人の気持ちは通じ合い、やがて絡みつく様に溶けていく。幸介はそつと遼の身体を抱き寄せ、その唇をそつとふさぐ。

遼は何の抵抗もなく、それを受け入れる事が出来た。瞳を閉じて、幸介のなすままに……

二人は、しばらく口付けを続けた。

オレンジ色の空は暗みを帯びていて、夕陽は沈もうとしていた。それはまるで、二人を世界から隠してしまおうとしているかの様に……

生まれた絆、壊れた友情。

幸介の遼に対する呼び名は、いつの間にか「綾瀬」で定着していた。

それは、告白の日から自然と訪れた変化であり、当人達を含めそれを気に留める者はいなかった。それ程、些細な事なのだろう。しかし、その逆は違った。

遼の幸介に対する呼び方。それは、告白の日から「幸介」に変わっていた。そこにあまり遠慮が感じられないのは、遼の性格故だろうか。

「綾瀬」

それは告白の日から数日が経ったある日の放課後。幸介はHRが終わるなり遼の元に駆け寄った。

「一緒に帰ろうぜ？」

「いいの？」

呼び方については遠慮のない遼だったが、行動に関しては随分と消極的になってしまふ。それは、今まで人と接する事を避けていた反動なのかもしれない。

「いいに決まってるだろ。俺が、綾瀬と一緒に帰りたいんだから」

「——うん」

遼は頷いて、帰り支度を済ませる。

「行きましょう」

「おう」

そんな会話をして、二人は肩を並べながら教室を後にした。

「そう言えばさ」

帰路を進む途中、ふと幸介が口に出した言葉。

「お礼の件、何か決まった？」

「？」

幸介が何を言っているのか理解出来ず、遼は首を傾げる。

「ほら。道案内してもらった時の」

「あ」

言われて、遼は思い出した。

幸介の事を考えるあまり、お礼云々の話など忘れていた。

「忘れてた？」

「……うん」

「ま、いいけどね」

と、苦笑する幸介。

「これからはさ。お礼とかそういうんじゃない、俺がしたいから色々としてあげたいと思うんだ。だから、して欲しい事があつたら言つて欲しい。本当に、遠慮なんかいらないから」

「うん。ありがとう」

幸介相手だとどこか一步引いてしまふ遼だったが、その反面、気持ちの上では素直になれた。心を許している。とも言える。

「でも——私、幸介と一緒にいられるだけで幸せだから」

「~~~~~」

遼の不意の言葉に、幸介は顔を真っ赤にして俯いてしまふ。その様子を見た遼も、自分が言った言葉に遅れて恥ずかしくなり、幸介同様に顔を赤く染めて俯く。
似たものカップルだ。

「幸介」

「ん？」

「一つ、お願いがあるんだけど」

控え目な口調・表情で、遼が切り出した。

「何？」

「手、繋いで欲しい」

」

幸介は一瞬哑然としたが、直ぐに朗らかな笑顔を作る。
黙ったまま、幸介は遼の手を握る。

「……ありがとう」

二人は、そつと手を取り合って歩く。
その繋がれた手の温もりを互いに感じながら……

○—————○

「しかし……まさか、相手が綾瀬さんとはね」

二人仲良く教室を後にした幸介と遼を見送った面々のうちの一人、
高坂がそんな呟き声を漏らした。

「っていつか、急変し過ぎだろ……」

「でも、何となくそんな気もしてたけどな」

広瀬の言葉に、中町がそう付け加える。

「ともあれ……俺の予想は当たってたわけだ」

どこか勝ち誇った様に、高坂はその面々に言い放った。
それを聞いて呆れる者もいれば、特に何も感じない者もいた。そして、それを良しと思わない者も。

「それは俺へのあてつけか？」

刺々しい物言いで、村石が言った。

一同が同時に村石に振り返る。

「いや、そんな事はないけど」

「けど、何だよ？」

村石にしれみれば、あてつけ以外のナニモノでもなかったし、ここまで来たら男として引き下がる事は出来なかった。だから、自分の感情以上に高坂に突っかかる。

「お前な……何そんなにムキになってるんだよ？」

そんな冷静な高坂の態度が、余計に腹の虫を苛立たせる。

「俺の事バカにしてるのか？　なあ、そうなんだろ？」

「何言ってるんだよ……」

「ハッキリ言えばいいだろ！」

もう、歯止めは効かなかった。
今にも殴りかかりそうな勢いで、村石は叫び散らす。

「落ち着け。って言っても聞かないんだろっな……」

「……………」

もはや、村石は何も言わない。ただ黙って、高坂を睨みつけている。

「そうだな……お前はバカだよ。何だか知らないうちにキレて、突っかかってくるんだからな」

「そもそも、俺達がつるもうって言うのが間違いだったんだよ」

「……………」

二人の刺々しい雰囲気、誰も口を挟む事が出来ないでいる。たった数週間の友情など、ほんの微かな綻びときっかけだけで、簡単に崩れ去ってしまう程に脆い。

それが、中学生生活の3年間という溝があるからこそ、余計に……当事者二人を除いた面子は、ここにきて幸介の凄さに気がついた。幸介の持つ独特の雰囲気。人と人を繋げる能力……

村石は一人教室を出て行き、その場に残された者達も誰も喋らない。否、何を話していいのかわからないのだ。

しばらく沈黙は続き、陽が落ち始めた頃、ようやく高坂が口を開いた。

「帰るか」

「そ、そうだな」

他の者達も一様に頷き、その日はどこに寄る事もなく皆解散した。

幸介という架け橋を失った瞬間、
一つの友情が壊れたのだった…
…

それぞれの生活

私立秀栄高校1年C組、川原佳乃は恋をしている。

それは誰にも言っていないし、誰にも知られていない、自分の胸の内に秘めてある気持ち。

表にその気持ちを出した事もないので、気付いている人物もいないはず。

と、佳乃自身は思っている。それは正しくて、現時点では誰も気がついていない。

川原佳乃という人物が、ある人物に恋をしているという事実は、本人以外には誰も知らないし、それを誰かに教えるつもりもなかった。

佳乃が好意を寄せる相手。それは、同じクラスの村野幸介。

今までに恋愛経験のなかった佳乃は、その気持ちに燦々を感じているだけだった。

その想いに自身がハッキリと気がついたのは、幸介に恋人が出来た時だった。

その恋人の名前が、綾瀬遼。二人が付き合い始める直前に出来た、佳乃の新しい友人。

友達になりたいと思っていた相手と友達になれた途端——いや、ほぼ同時に、佳乃は初めての失恋を経験した。

皮肉な話だ。

佳乃はそう思った。

しかし、その気持ちを表に出すつもりはなかった。せっかく結んだ友情を壊したくはなかったし、自分の感情を理解するに至るのが遅すぎたと、自覚出来たからだ。

自分が悪い。そう、ハッキリと認識出来る。

（バカだな、あたし……）

テキパキとした性格。リーダーシップを取る事に優れ、今までそうした役職につく事も多かった。だから、自然と出来たグループの中心となっていた。幸か不幸か、その状況が初めての恋愛感情を上手く誤魔化してきたのだ。

だから。と、佳乃は思う。

これからも、そうすればいい。と……

今まで通り、同姓の友人達を中心にいれば、忙しく動き回っていれば、嫌な事は忘れられると……

（忘れよう）

ただ、偶然生まれ、気がついてしまった想い。

そんな想い、気がつかなければ良かった。そう思っても、気がついてしまった以上それをなかった事には出来ない。だから――

（忘れよう）

そうすれば、全てが上手くいく。

そう信じて、佳乃は目を瞑る。

明日は休日。遼や、他の友人達と一緒に遊びに行く約束をしている。

気持ちを切り替えなければ……

そんな事を考えながら、佳乃は眠りについた。

明日になれば、燻っていた想いなんて、全てなくなっていると信じて……

○

○

それは良く晴れた日の午後。

霧島優子は、休日を満喫するべく家でごろごろしていた。

普段は快活に動き回るので、運動が好きとか、動いていないと落ち着かないなどと思われがちだが、実は優子は眠る事が大好きな女の子だった。

というか、面倒臭がりなのだ。それも、自分一人だけに関する事のみに対して。

誰かに迷惑をかけるわけでもなく、ただ自分一人の責任下で行われる事だと、極端に面倒な事を嫌うのである。

「優子姉、邪魔」

ごろごろしている場所が悪かったのか、声をかけられて身を起こす優子。

声をかけてきたのは、優子の弟の健一だ。

優子の家族構成は、両親と妹の晴美。そして弟の健一の五人家族。一つ下の晴美は中学3年生で受験生。そして中学1年の健一。三者三様に性格は全然違うが、3人は仲が良い。

健一に至っては、「優子姉」「晴美姉」と二人の姉に懐いているし、晴美は晴美で優子の事をかなり信頼している。優子という長女を中心に、姉弟は仲良く生活をしているのだ。

その仲の良さには遠慮なんてものはほとんど存在せず、姉に対しても邪魔なものは邪魔と言い張れるというわけだ。

「健一は偉いねえ」

などと言いながら、優子はごろごろしていた居間を出る。

優子という邪魔者がいなくなった隙に、健一は途中だった掃除機かけを再開する。

優子が健一を偉いと言ったのは、つまりはそういう事だ。家事の手伝いなど、優子は滅多にしないからだ。

からかわれる方も慣れたもので、大して反応もせずにしたものだから、優子はつまらないと感じつつもそれ以上は何も言わず、自分の部屋に戻った。

コンコンと、扉をノックする音が控え目に聞こえ、優子は返事をする。

「はい？」

「お姉ちゃん」

小さい声だが、聞き取れない程ではない。それに言い回しから、優子は相手が誰だかすぐに理解した。

「入っていいよ」

「うん」

と、ノック同様控え目に扉が開き、部屋の中に一人の少女が入ってきた。

と、もったいぶらなくてもすぐにわかる事だが、優子の妹の晴美だ。

「どうしたの？」

学校と同じ様に、明るい口調でそう尋ねる優子。

晴美の声が小さいのは昔からなので、それに対して特に感じてい

ない。だから、いつも通り。

「ちよつと、勉強で行き詰っちゃって……」

「なにになに？ お姉ちゃんに任せなさい」

学校とほぼ同じノリだが、ただ一つ違うのは、優子が？お姉ちゃん？である事だ。いつもの同等の立場とは違い、たとえほんのわずかも上の立場にいる。それを意識しているわけではないが、それでも優子は？年上？であろうとする。姉としての、ほんのわずかな誇り。とでも言うべきか。しかし、それを誇示しようとしているわけではない。あくまでも自然に。頼りにされる様に振舞っているだけである。だからこそ、優子は晴美と健一に好かれているのだ。

「数学の問題なんだけど……」

と、テキストを見せる晴美。

こう見えて、優子は割りと頭が良い。特に理数系に強く、高校に入った今も勉強でそれ程困った様子はない。

周囲の友人達からは、揃って意外。と言われているが……

「はいはい。どれどれー？ あ、これはね……」

と、テキパキと数式を晴美に教え込んでいく。

自分で理解している上に、教え方も上手い。実は教師に向いているのかもしれない。

「ありがとう」

勉強を見てもらった晴美は、ご満悦の表情でそう言った。

「いいえ。晴美は受験生だからね。あたしも去年は苦労したし……出来る限り、協力はするから。わからない事があつたら何でも聞いていいよ。って、前にも言っただけだ」

「うんっ」

「あ、理数以外はあんまり力になれないからね？」

と、念を押しておく。

「うん」

クスクスと小さく笑みを零しながら、「それでも、ありがとう」と言つて、晴美は優子の部屋を去っていった。

その頃にはもう陽が沈み始めており、空はオレンジ色に染まっている。

これから、もっとその深みを色濃くし、赤い世界へと姿を変えていく。

まるで、何かを暗示しているかの様に……

○

村石悠二は、クラスから孤立し始めていた。

表面上はそうでもないが、悠二自身が、周囲とコミュニケーションを取らなくなってきたのだ。

高校に入って、クラスが発表されて。

悠二と同じ中学校から上がってきた生徒は一人もいなかった。

自分は独りだ。

悠二は、そう思い始めていた。

最初は違った。

村野幸介……その一人を中心に、違う中学から上がってきた木島裕二と広瀬弘一。そして、幸介と同じ中学から上がってきた中町宏司と高坂准。そして自分。他のクラスメートともそれなりに仲は良くなったが、その5人は主立ってつるんでいた。それなのに……

（俺は、皆の事を何も知らないんだ）

一人だけ、誰の過去も知らず、一人だけ皆の事を理解出来ていない。

それは間違いとは言いつれない面もあつてか、悠二は必要以上に自分は何も知らないと思ひ込んでいた。

そして、まるでそれを指摘された様で……

悠二は、高坂に対して嫉妬を覚えた。

自分がバカにされている様に感じ、高坂の事を目ざとく思う様になった。

それからだ。

悠二が、クラスとの接触を取らなくなったのは。

（俺は、皆とは違うんだ……）

そう思ってしまうのには、訳があつた。

悠二——というよりも村石家は、悠二が中学を卒業するとほぼ同時に、この街へ引っ越してきたのだ。

だから、悠二には知り合いがない。

それが余計に、悠二に孤立感を覚えさせる。

「悠二」

階下から、悠二を呼ぶ声がした。

悠二は寝かせていた身体を起こし、ベッドを降りる。

「悠二？」

もう一度声がし、悠二は「今行く」とだけ言って、直ぐに部屋を出た。

「何だよ？」

一階に下りた悠二は、自分呼んだ母親に向かってそう尋ねた。

「ちょっと、お話したいなって思って」

「はあ？」

「だって、帰ってきた時の悠二の顔——かなり、酷かったから……それに、最近元気ないみたいだし」

そんなに態度に出ていただろうか？

そう思ったが、やっぱり出てたんだろうな。という結果に終わった。今までずっと自分を育ててきた親が言っのだから、そうなのだろう。と……

「もし何かあるんだったら、お母さんに話してみて？」

「……………」

悠二は黙り込む。

何もないわけじゃないし、誰かに聞いて欲しい。という願望はある。しかし、それは母親に対しては出来ない。悠二はそう思っている。

引越してきた事に理由の一端がある事は、悠二自身理解しているからだ。

「何でもないよ」

「……本当に？」

悠二の顔を押さえ、瞳を見つめて問う。

悠二はその瞳を見つめ返す事が出来ず、逸らしてしまう。それでも、

「本当だよ」

と、小さく言った。

「……そう。わかった。今は何なくても、もしこれから何かあったら、ちゃんと話してね？」

悠二が何かを隠している事をしっかりと理解した上で、母親は優しくそう言った。

悠二は無言で頷き、踵を返す。

「直ぐに夕飯作るから、少ししたら降りてきなさい」

「ああ」

そう答えて、悠二は自分の部屋に戻って行った……

日曜日の出来事

それはとある土曜日の夜の事。

幸介は村石から連絡を受けていた。

「どうした？」

『……明日、時間あるか？』

そう聞かれ、幸介は頭の中の予定表を検索する。

「（明日は、遼とは会う約束してないし……）そうだな。特に用事はないぞ？」

『それじゃあ、明日話したい事があるんだけど……そうだな。正午に、桜台の駅まで来てくれるか？』

「わかった」

『それじゃあ、明日な』

「おう」

電話を切り、部屋に戻る。

（……明日の正午、桜台駅か）

遅刻しない様にしないとな。

そんな事を考えながら、少し早い時間だったが、幸介は眠りに着

いた……

○————○

「今日は買い物です！」

無闇に高いテンションで、佳乃はそう言った。

今日は日曜日。特にこれと言って目的があって集まったわけではないが、ウィンドーショッピングでもしよう。という名目で、彼女達はここ、桜台の駅前に集まっていた。

時刻は午前10時。それが待ち合わせ時間で、一人を除いて全員が集まっている。

今その場にいるのは、遼と佳乃。聡美と陽子。そして、まだ来ないのは優子。定番化しつつある面子だ。

「でも、まだ優子が来ません……」

大仰にそう言う佳乃。それはオーバーな振る舞いで、わざとそうしているのがわかる様なモノだ。

「でも、遅れるって連絡あったんでしょ？」

とは、一人それが理解出来ない遼の言葉。

「まあね。10分くらい遅れるって」

「そういうとこ、ルーズそうに見えて意外とマジメだもんねー」

「って言うよりも、根がマジメなのよね」

佳乃の言葉に、聡美と陽子がそう続いた。

「それで、今日はどうするの？」

「適当に回るつもりだけど……」

遼がふと尋ねると、佳乃が言いかけ、

「お待たせー！」

人垣を掻き分け、優子が走りながらやって来た。

何だかんだで5分の遅刻だ。相当急いできたのだろう。ぜえぜえと肩で息をしている。

「5分か……まあ、許してあげる」

「……ありが、とう……はあ……」

少しの間返事をするのも辛そうだったものの、深呼吸をしたら少しは楽になっただけ、佳乃の言葉にも途切れ途切れながら返した。

「大丈夫？」

「うん……ありがとう、遼」

やっとの事で復活した優子が、もう一度深呼吸をした。

「かんぜんふつかつ！」

「おめでとう」

その辺りは付き合いの長い佳乃。いきなりテンションをトップに上げた優子に、冷静に応じる。優子がいない間は自分が盛り上げ役に。優子がいるのなら、自分はストッパー役に。と、佳乃は自分の役所をしっかりと使い分けている。それが、佳乃が佳乃である所以とも言える。

「それで、今日はどうするんだっけ？」

「あんたねえ……まあいいわ。とりあえず、大通りを歩いてみましよう」

「なんで？」

「ここにボケはいらないわよ？」

「……はい」

そんな優子と佳乃のやりとりを見て、苦笑を浮かべる3人。

（平和だな）

なぜかふと、佳乃はそんな事を思った。

それがあまりにも日常めいた光景だったからか、それとも——
自分の心が、昨夜に比べて平穏としていたからなのか……

「あつ。あたし洋服見たいんだけど、いいかな？」

歩きながら、そう切り出したのは聡美。
それを否定する者は当然なく、一同はとりあえず近場にある店に
足を向ける。

「こつこつ時って、誰が一番街に詳しいかわかるよね？」

「そう？」

ふと優子が漏らした言葉に、聡美が聞き返した。

「そんな感じしない？」

「うーん……言われてみれば、そうかもしれない」

「でしょ？ そんなわけで、良いお店を知ってる人は、ちゃっちや
と進言しておくよーに！」

「何であんたが仕切るのよっ？」

「あ、佳乃のポジションだったね」

「あんたねえ……」

と、皆から小さく笑い声が漏れる。

遼にとって、それは初めてとも言える楽しさ。

友達と共有する時間。何か一つの事で、小さな事だけでも、確
かに笑っていられる。そんな時間。

「こつこつの……いいね」

「ん？　どうかした？」

本当に小さく呟いた遼に、佳乃がそう聞いた。

「何でもない……それじゃあ、私がよく行くお店を紹介します」

『え？』

遼の言葉に、一同が同時に声をあげた。

「何、その「え？」って……」

「だって、ねえ？」

「遼からそんな言葉を聞くなんて……」

「意外」

「……まあいいけど」

と、複雑な表情を浮かべる遼。

「悪い意味じゃないわよ。あんまり、大衆向けの場所には行かなさ
そうないメージだったから」

「ああ！　つまりマイナーなお店を知ってる？」

「優子。あんた何気に失礼だよ……」

「普通のお店だから。確かに、有名なお店ではないけどね」

と、苦笑を浮かべる遼。

そんな空気が、どこかくすぐったくて……

遼は、もう一度柔らかく笑みを浮かべる。

「それじゃあ、着いて来て？」

と、先頭を歩く遼。

いつだったか、こんな風に誰かを先導した事があったな。と、思
い出す。

それは、ある日の休日。初めて、幸介に声をかけられた日。
その事を思い出し、微かに笑う遼。

「どうしたの？」

「ううん。何でもない。ただ、楽しいなって思っただけ」

「そう？ それは何よりです」

優子とそんな言葉を交わしながら、一行は遼の行き着け（？）の
お店へと向かった……

○ ————— ○

日曜日。午前11時半。

幸介は、既に待ち合わせ場所である桜台駅の前へとやってきてい
た。

前回の失敗を考え、念の為早めに家を出た所、迷わずに来れたの

で時間が余ったのだが……

(ま、いつか)

特に気に留めず、近くのベンチに腰かける幸介。

村石が来るまで、ぼけえくっとしてればいい。そう考え、幸介は言葉通りぼけえくっ空を見上げる。

「幸介」

名前を呼ばれ、幸介は上げていた頭を下げる。

「村石……早いな？」

「お前こそ。それより、悪いな」

「いや、特に用事もなかったし。それじゃあ、どこか行こうか」

「何も聞かないのか？」

「電話してきて、わざわざ会って話したいって言うんだから、それなりに気を遣う内容なんだろう？　だったら、こんな所で話せないんじゃないか？」

「まあな……悪い。それじゃあ、とりあえず飯でも食いに行こうぜ」

「そうだな」

正午に待ち合わせという事で、お互い昼食はとっていない。
いや、おそらくこういう流れになるであろう事を想定して、食べ

て来ていないというべきか。

二人は近くのファーストフードに入り、各々にオーダーを済ませる。

席は2階。駅前、それも休日の昼時とあって、店内はかなり混雑している。

「こんなんじゃ、食べながらってわけにはいかないよな？」

幸介の言葉の通り、店内は喧騒に包まれている。とても落ち着いて話が出来る雰囲気ではない。

「いや、逆にこういう感じの方が話しやすい。皆、自分達の話題にしか耳が向かないだろうしな」

「そうか。まあ、村石がそう言うならいいけど」

そう言いながら、幸介は頼んだ商品に手を伸ばす。それを見て、村石も食べ始めた。

それから、二人共黙々と食べ、そろそろ終わるかという頃、村石が口を開いた。

「俺さ……高坂達と、ケンカした」

「は？」

「幸介……お前絡みの事でだ。っても、お前が悪いわけじゃないけどな」

「……………」

突然の言葉に、幸介は何も言う事が出来なかった。
いや、言葉の意味を正しく理解出来たかどうかさえ怪しい。

「何言ってるんだよ？」

「……多分、お前の事だから気がついてないと思うけどさ……クラ
スの連中とも、何だかんだでギクシャクしてる。俺から、距離を置
いてるんだけどな」

自嘲気味に呟く村石。

それは、幸介が——いや、誰もが望まなかった状況。幸介が嫌い、
かつて遼の暮らしていた世界……
独りであるという事。

遼と村石との違いは、それを望んでいたか否か。望んでいないか
らこそ、村石は悩んでいる。今、自分が何をすべきかを。
ただ、素直になる事が出来ずに、じょじょに皆から離れていつて
しまう現状。

もしかしたら、幸介なら何か打開策を示してくれるかもしれない。
なぜか、そう思えたから……

「幸介——お前だから頼めるんだ。お前なら、解決してくれる気がする
んだ……自分勝手なのはわかってる。だけど……」

「わかった」

村石の言葉を遮る様に、幸介は頷いて見せた。その瞳にはもう驚
きは残っておらず、ただ決意が宿っている。

「そんなの俺自身が望まないしな。それに、俺にも原因の一端があ
るみたいだし……何とか、してやるさ」

その言葉は決して嫌味なモノではなく、決意の証。
どこか遠くに据えた言葉。

「……ありがとう」

小さく、泣きそうな声で――

村石は、そう言った……

それから、二人は直ぐに別れた。
遊ぶという気分でもなかったし、お互いに色々と考えたい事がつ
たからだ。

村石は直ぐに帰宅。幸介は、街を適当にぶらついている。

「……………」

幸介は、歩きながら考える。

自分が何をすべきなのか。どうすれば、以前の様なクラスの関係
を作れるのか……

たとえ自分の事ではなくても、【独り】は嫌いだから……

太陽が、少しだけ傾いていた。

まだ、陽は長い……

○—————○

「いやはや。目移りしてしまいましたよ」

「変な言葉遣いしないでよ」

店を出たところで、聡美と陽子がいつもの様に漫才（？）を始めた。

遼はそれを見て微笑みを浮かべる。

「友達？という。という雰囲気、遼の気分を微かにだが高揚させるのだ。」

「それにしても、遼ホントにいいお店知ってるね。あたしも今度から、この店を使いそう」

「うん。品揃えも悪くないし、値段もそれなりにお手ごろだもんね。あたしも、これからは来る様にしようかな」

聡美の言葉に、佳乃が頷いた。それに優子も続く。

どうやら陽子はこの店を知っていたらしく、遼とはその話題で少し盛り上がりたりもした。

「って言うかさ……だからって、いきなり買うのもどうかと思うよ？」

片手に荷物を持つ聡美に、佳乃が呆れた様に言った。

「まだ出始めなんだから。他で買う物がなかったら、後で買いに来れば良かったのに」

「だめだめっ。もしかしたら、品切れになっちゃうかもしれないじゃないっ。欲しい物を見つけた時は直ぐに買う！それが買い物の秘訣！」

妙に気合の入った口調で豪語する聡美。おそらく、それで痛い目

を見た事があるのだろう。

「そんなわけで、次行こうか？」

「だから、何であんたが仕切るのよ……」

辟易とした佳乃の言葉に、一同から苦笑が漏れる。

それから街中をぶらつき、やがて昼時にさしかかり、一同は昼食を取るべく近くのファミレスに入った。

皆の動作一つ一つが、そしてその空気さえもが、遼にとっては新鮮なものだった。

自分一人で行くのと、誰かと一緒に行くのとでは、同じ場所に行くのでも何かが違う。遼は、その事に気がついた。その違いが、悪い事ではなく、楽しい事だという事にも。

「あ」

ファミレスを出たところで、優子がそんな声をあげた。

「何？ どうしたの？」

「村野君だ」

村野君。その名前に反応したのは、遼と、佳乃……

（吹っ切れて、ない……）

昨夜の苦悩を思い出し、佳乃は慌てる。表面上は平静を装っているが、その内心はかなり動揺している。

そんな佳乃と違い、遼は素直に喜びの表情を浮かべた。

「おい！ むっらのくーん！」

優子が、幸介に声をかける。それに気がついた幸介が、顔を上げて遼達の方を向く。

優子が手招きをし、幸介はそれに応えた。

「よう。偶然だな」

それは皆に言った言葉だが、視線は遼に向けられている。

「村野君は、一人でどうしたの？」

「ああ。えっと、さっきまでは村石といたんだけど……」

持ちかけられた相談の話など出来るはずもなく、言葉を濁す幸介。

「ふーん。で、今は一人なんだよね？」

「まあ、そうなるけど」

「それじゃあさ、あたし達と一緒に遊ばない？」

優子はノリノリで幸介を誘う。遼の、嬉しそうな恥ずかしそうな、そんな表情を見て楽しんでいるのだ。

「……いや、さすがにこの面子の中に男一人ってというのはな……」

「そっか。残念だね、遼」

「えっ？　そ、そんなことは……」

「あるよねえ。そうだよねえ。で、遼は村野君と一緒にいたいんだよね？」

「え？　あ、でも……」

幸介との事になると、とことん弱くなる遼である。もはや優子のいいオモチャだ。

「おい、霧島。綾瀬が困ってるだろ」

「お。ナイト様のお出ましですか？」

「茶化すなよ……何にせよ、今日はいいよ。女の子同士、楽しく遊んでくれ」

考えたい事もあるし——その言葉は飲み込み、口には出さない。

「そっか。まあ、あたしは別にどっちでもいいけどね」

「それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらっね」

「おう。じゃあな」

そう言って、幸介はその場を去っていった。
楽しそうな表情の優子。ちよつと複雑な心境の遼。
そして、俯いている佳乃。

「あのさ……」

ふと、聡美が声をあげる。

「今の、誰？」

「うちのクラスの村野幸介。 遼の彼氏♪」

『え！？』

驚く聡美と陽子。

驚くのも無理は無い。

そして、その後遼が質問攻めになったのは言うまでもないだろう

……

それぞれの気持ち

遼達と別れた幸介は、一人帰路を歩んでいる。

黙々と、たまに空を仰ぎ――

思考を巡らせる。

村石からの相談。

自分は、何をすればいいのか。

自分には、何ができるのか……

そもそも、なぜ村石は他の者達と仲違いしたのか……

幸介は、その理由すらわかっていない事に気がついた。それを知らない事には、何の解決策も導き出せない。

（誰かに聞くのが早いんだろうけど……）

そこでまた、考える。村石本人には、あまり聞ける雰囲気ではなかった。

かと言って、仲違いの相手であるクラスメートに聞けるわけもない。

（どうすりゃいいんだよ……）

結局、自分で考えるしかないのか。と、うなだれる幸介。
が、一つの閃きが脳裏を過ぎった。

（綾瀬がいるじゃん）

自分の彼女になら、相談を持ちかけられる。そう思ったのだが……

（待てよ……綾瀬、そういうのに疎そうだな）

自分の事を棚に上げて、そんな事を思う幸介。
と、そこでまた一つ閃く。

（霧島とか、そういうのに詳しそうだな。それに、直接ケンカした相手って事もないだろうし……）

遼と一緒にいた優子の姿を思い出し、そう考える。

一度浮かんだその考えは、とても良い案の様に思え、幸介は踵を返しかけた。

「と、もう戻ってもな……同じとこにいるわけないし……今日は帰るか」

そう呟き、反転しかけた身を元に戻す。

自分がどうすればいいのかは、まだわからない。

それでも、出来る事を一つ一つやっていこう。

そうすれば、きっと解決出来る。

幸介は、自然とそう考えていた。

乗り越えられない壁は、存在しない。

幸介は、ずっとそう考えてきた。だから、今回だって……

今幸介に出来る事は、？知る？事。だから、機を待つ事にする。

今は、身を休める時だ。そう思い込み、幸介は何となく家路を急いだ……

○

○

友達との買い物。

そして、幸介との偶然の出会い。

全てが新鮮で、全てが楽しく思える一日だった。

遠は、一人夕食をとりながら一日を振り返っていた。

（また、皆で遊びに行きたいな）

そう思えた。

今までとは、世界の全てが違う色彩に彩られて見える。

幸介、優子、佳乃、聡美、陽子。

そして、これから増えるかもしれない友人……

ただ【独り】でいる事を望み、全てを拒絶してきた日々。

今となつては、それすらも懐かしく思える。

「明日もがんばろう」

自然と、そんな言葉が口に出た。

これから先も、こんな楽しい日々が待っていると、そう思えたから……

○

「どうして、あんな所で会うかなあ」

皆と別れて家に帰った佳乃は、自分の部屋に籠るなり、そんな喧きを漏らした。

一晩で、整理をつけたと思っていた自分の？想い？。それなのに、たった一目見ただけで、その？想い？は湧き上がってきた。

「ダメだな、あたし……」

思っていた以上に強い自分の？想い？

それに翻弄される自分。

思い返す昼間の光景。

遼に詰め寄る陽子と聡美の姿。そして、嬉し恥ずかしそうな遼の姿。その様子を楽しそうに眺める優子の姿。

鮮明に思い出す。幸介と会ってから、どこか上の空だったはずなのに……

むしろ、幸介に会った後の事を克明に記憶している。

気持ちの整理がつかない。どうすればいいのか、わからない……

諦めなければいけないと分かっているのに、諦められない……

でも、諦めようとしている。矛盾する想い。

頭の中を二つの想いが駆け巡る。

いつの間にか、佳乃はそのまま眠ってしまった。気持ちに決着が着かないまま。

何も、解決する事なく……

解決への糸口

「霧島」

村石から相談を受けた翌日の昼休み、幸介は優子に声をかけていた。

「ん？ 何か用かな？」

「用があるから話しかけたんだけど」

「そうでしょうねえ」

からかう様な口調で、けらけらと笑いながら言う優子。

「マジメな話なんだけど……ちょっと抜けられるか？」

「……いいよ」

幸介の雰囲気を感じて、優子は真顔で頷く。

優子は遼の様子を一瞬見たが、特に気にした様子はなかった。

（信頼されてるのかな）

などと、自惚れてみる。

（あ。信頼されてるのは村野君か）

が、すぐにそう思い直した。

「で、どこに行くの？」

「あんまり人がいない方がいいな……裏庭とか」

「じゃ、裏庭に行ってみようか」

「悪いな」

「いいえ」

○

「で、話って何？」

裏庭に着くなり、さつさと本題を切り出す優子。意外とサバサバした性格だ。

「実は、村石の事なんだけど……」

「村石君？ 村石君がどうかしたの？」

意外な言葉に、優子は一瞬呆気にとられた。しかし、すぐに幸介に聞き返した。

「あいつ、最近皆の事避けてるって思わないか？」

「うーん……言われてみれば、そうかもねえ。あたしは特に気にし

てなかったけど」

「実は俺もだ」

「どういう事？」

幸介の言葉に、思わず呆れ混じりに聞き返す優子。

「村石自身から相談されたんだ。あいつ、高坂達とケンカしたらしくて……それから、他の連中とも距離を置く様になったって……」

「んー。何だか、あんまり話が読めないんだけど？」

「悪い。俺も、何だか混乱してる……」

幸介は、自分が情けなく思えてならなかった。

うまく言葉をまとめる事が出来ず、うまく言葉を伝える事が出来ず……

「俺さ」

「うん」

「あいつに、頼まれたんだ。何とかして欲しいって。でも、俺あいつの事何も知らなかったんだなあ。って感じるだけで、何も解決策が浮かばなかった。だから……」

「村石君について、何か知らないかって事？」

「ああ」

「うーん……あたし、別に情報通っていうわけじゃないんだけどね……」

と、苦笑する優子。

「あ。確か、中学卒業してからこっちに引っ越してきたんじゃないかな？
ったっけ？」

「え？ そうなのかな？」

「うん。誰かから聞いた覚えがあるよ」

「そうか……ありがとう」

「ううん。ごめんね。大した力になれなくて」

「いいや。それだけでも十分だよ。ありがとう」

キンコンカンコン。

そこで、昼休みを終えるチャイムが鳴った。

「戻るか」

「そうだね」

二人は、やや早い足取りで教室へと向かった。

幸介は、移動しながらも思案していた。
村石が皆と距離を置く理由。一人、違う地からやってきたという
事実。

何かが、幸介の中で繋がった気がしてた……

○

「話がある」

その日の放課後、幸介は木島をそう言って呼び出していた。
声をかけたのは放課後になって直ぐ。人気がなくなるの待ちたい
からと、少し時間を潰してくれと頼んであった。
時計の短針はもうすぐ5を差そうとしている。

（そろそろか）

5時になったら、屋上に来てくれ。そう言っただけで、幸介は
少し前に屋上にやってきていた。今は、木島がやって来るのを待つ
ばかりである。

ガチャリ。

屋上と屋内を隔てるドアが開かれる音が響く。
屋上には幸介以外に人はおらず、その音がやけに大きく響いた様
に聞こえた。

屋上にやってきたのは、木島裕二。幸介が呼び出した本人だった。

「待たせたな」

「そんな事はないぞ」

「わかつてる。社交辞令ってヤツだ」

「……そうか」

「ああ」

何となく、重苦しい雰囲気。それは幸介も木島も望むものではなかったが、これから話す内容が明るい事ではないのを物語っている。どちらからも、その雰囲気壊す様な真似はしない。

「それで、どういった用だ？ 何となく、予想はつくんだけど」

「村石の事だ」

幸介は何の捻りも加える事なく、本題へと入った。

「やっぱりか」

予想していた通りだったらしく、木島は軽く苦笑を漏らす。

「そろそろ。聞いてくるんじゃないかって思ってたんだよ」

「……何があつたんだ？」

少しだけ明るく振舞う木島に対し、それでも真剣に尋ねる幸介。その様子に息を呑み、木島も真剣な顔つきになる。

「大した事じゃない。俺は、そう思うよ。でも、な……本人が、相
当気にしてるみたいでさ」

「……………」

「最初はさ。お前が、最近付き合い悪くなってきたって話だったん
だ。んで、高坂が？村野幸介恋愛説？を説き始めたわけだ」

「は？」

「いや、だから。お前が、恋をしてるんじゃないかって、高坂が言
い出したんだよ」

その言葉で、高坂に投げかけられた質問を思い出す幸介。

？お前、好きな娘はいるか？？

なぜそんな質問をされたのか、ここにきてわかった。

「聞きに行っただろ？」

「ああ」

「あの時だよ。ケンカしたの……お前の反応をさ、高坂が的確に当
てるんだ。いや、ちょっと違うな……お前と高坂って、中学一緒だ
る。だから、高坂はお前の事に俺らより詳しくて、お前のあの時の
反応を細かく分析してくれたわけだ」

「……………」

「その言い方が気に食わなかったのか、それとも自分が除け者にされたる様に感じたのか……村石のヤツ、すげえ怒り始めてさ……極めつけが、その分析が結果的に当たってたわけで……村石にしてみれば、面白くなかったんだろ。高坂の態度も、自分が皆の事を知らないのも……」

半分八つ当たりみたいなものだ。と、最後に付け加え、木島は息を吐いた。もう、何も言う事はない。とでも示す様に。

「……そんな事があつたのか……」

「ま、そういう事だ。あいつ、一人だけ同中のヤツいないからな。俺から言わせれば、本当に大した事じゃない」

「そうか……わざわざありがとな。こんな時間まで残ってもらって」

「いや、気にするな。村石に、頼まれたんだろ？」

「！」

「何でわかつたんだ？　って顔してるな」

そう、苦笑する木島。

「わかるさ、それくらい。付き合いは確かに浅いけど、何となく、それくらいはさ……村石も、気にしなければ良かったんだよ。それに昔の付き合いがあるのは仕方ない事なんだから、こうして少しずつ相手の事を知っていけばいい。それだけの話だ」

「……そう、だな」

「それじゃあ、俺は帰るよ」

「ああ。本当に、ありがとな」

「だから気にすんなって。じゃ、また明日な」

「おう」

そう応えて、幸介は木島が屋上から去って行く背を見送った。
再び、屋上には幸介一人しかいなかった。
風が吹き抜ける。

夕焼けが広がりがりつつある。まだ陽は沈まない。

しかし、何となく夜の空気が近付いてきつつある気がして、幸介も早々に屋上を後にする事にした。

自分が誰に対し、何をすればいいのか。その答えを見つける為に、幸介は帰路に着いた……

告白

その日は、良く晴れていた。

幸介が村石の頼みを聞いてから数日。状況は掴めた幸介だったが、今一つ動き出す気にはなれなかった。解決出来る。という確証がなかったからだろう。優子と木島の言葉以外にも、いくらか情報集めをした幸介だったが、未だにハッキリと解決出来るという確信は持てずにいるのだ。

「どうしたもんかなあ」

幸介は一人、屋上で寝そべっている。

うららかな日差しを眩しそうに見上げながら、ずっと同じ事で頭を悩ませている。

普段あまり頭を使わないせいにか、ここ数日で大分疲れがたまっている様にも見える。

「村野君」

ふと声をかけられ、幸介は身を起こした。

振り返ると、そこには同じクラスの川原佳乃が立っていた。

「川原か。どうした？ 何か用か？」

「……うん」

いつもの佳乃らしくない、沈んだ様子。その様子がいつも違う事くらいは、鈍い幸介も気が付いた。

「……………」

急かす様な真似はせず、佳乃が口を開くのを待つ幸介。

「あたし、村野君が好き」

「……は？」

一瞬、幸介は何を言われたのか理解出来なかった。

「あたしは、村野君の事が好き」

「川原……それ、本気で言ってるのか？」

聞き様によつては随分な発言ではあるが、幸介の言葉もある意味最もなものだ。

「お前、綾瀬と仲良いんだよね？　なのに、何で……」

「何でだろうね……二人の事はわかってる。だから、本当は言わないつもりだった」

そう語る佳乃の表情は、酷く辛そうなもので……幸介は、目を背けたい衝動に駆られた。しかし、逸らさない。今目を逸らすという事が、どれだけ相手にとって失礼な事か、本能的に理解しているのだ。

「でも、ダメなんだ……どんどん、気持ち溢れてきちゃう……」

「川原……」

「いいの！ 返事は、いらない。わかってるから……でもね、伝えておきたかったんだ。それに……伝えれば、それで、きちんと振られれば、諦められるんじゃないかって、そう思ったから……」

「川原……ごめん……」

「いいの。こっちこそ、ごめんね……それじゃ！」

そう言って、佳乃は踵を返して屋上から駆け去っていった。

幸介はその遠ざかっていく背に何も言う事は出来ず、ただ立ち尽くしていた。

佳乃の想いに応える事は出来ない。自分には、綾瀬がいるのだから。

そして、今はそれどころではない。厄介な問題を抱えている。

幸介は、きちんと気持ちの上で答える事も出来なかったな。と、後悔する。だから、佳乃の出て行った扉に向けて、もう一度謝る。

「ごめん」

その後、幸介は昼休みが終わるまで屋上にいた。

ずっと、同じ事で頭を悩ませながら。そして、ほんの微かだけでも、一人の少女に対する謝罪の念を感じながら……

○

最近、幸介の様子がおかしい。

それ程付き合いが長い訳ではないが、それでも遼はそう感じていた。

声をかければ変わらずに笑みを返してくれるし、幸介からだって声をかけて来なくなっただけじゃない。それでも……

（いつも、心ここにあらず。って感じ……）

それが、遼には不安で仕方なかった。

幸介の事を信じていないわけではない。それでも、不安を感じずにはいられない。自分の事以外に心が向いているのが、怖くて仕方がない。そんな想いが、日に日に強くなってきていた。

良く晴れたその日の昼。遼はその不安を払拭する為に、幸介と直接話をしようと思った。だから、探した。いや、探す必要などなかった。短い付き合いだけれど、何となく行動パターンもわかってきていたから。

幸介は屋上にいる。なぜか、そう確信出来た。だから、遼の足は自然と屋上へと向かっていた。

「川原か。どうした？ 何か用か？」

屋上へと繋がる扉に手をかけた瞬間、幸介の声を聞いて手が止まった。

「……うん」

応える相手の声にも覚えがあった。川原佳乃。？友達？と、そう呼べる相手の一人。幸介に向ける感情とは毛色が違うが、間違いなく遼が好きだと思える相手のうちの一人。

その二人が一緒にいて、何かを話してる。何の問題もない。それ

は、嬉しい事のはずだ。遼は、そう思う。それなのに、身体が動かない……

「……………」

「……………」

扉越しに、二人の緊張が伝わってくる。

遼は、自分の感情を理解出来なかった。今までに感じた事のないモノ……

最近覚えてきた嬉しい感情ではなく、胸が締め付けられる様な、そんな感情……

「あたし、村野君が好き」

その言葉を聞いた瞬間、遼は扉から手を離し、その場から駆け去っていた。

どこに向かっているのかもわからない。なぜ、その場から離れているのかもわからない。それでも、その場所にいたくなかった。それ以上、話を聞いていたくなかった。

（胸が、苦しい……）

鼓動が早まり、胸がズキズキと痛む。

自分の中に生まれた感情が何だかわからず、遼はとにかく走る。ドンツ。と誰かにぶつかり、遼は足を止める。反射的に、顔を上げる。

「遼？」

「ゆ、優子……」

遼の顔を見て、優子は驚いた。遼は、涙を流していた。哀しそうな表情を浮かべ、止まる事を知らないかの様に。

「どうしたの？」

優しく問いかける優子。その表情は、彼女が持つ？姉？の表情だ。

「……………」

「……言えないならいいよ。今は、好きなだけ泣きなさい」

「う……………」

優子に抱き包まれ、遼は優子の胸に顔をうずめる。

優子は優しく遼の背をなでる。

廊下の真ん中だということにも関わらず、遼は声を殺しながらも涙を流す。優子の胸の中で、本当に止まる事を知らないのではないかと思う程に。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴っても、二人はしばらくその場に立ち尽くしていた……

○————○

結局、遼が落ち着いたのは午後の授業が始まってから十数分が経ってからだった。

遼と優子は今、裏庭の先にある小さな広場のベンチに腰掛けてい

る。「戻りたくない」そんな遼の言葉を聞き、優子が連れてきたのだ。

「どうしたの？ って、聞いてもいい？」

出来る限り優しく、柔らかい口調で、優子が言った。遼はしばらく何か考えていた様だったが、やがて黙ったまま頷いた。それでも直ぐに口を開こうとはしない。

「いいよ。遼が言えるまで、待つてるから」

「……ありがとう」

搾り出す様に、お礼の言葉を紡ぐ遼。その言葉すらやつと出したといった感じで、とてもじゃないがしつかりと話せる様には見えない。気持ちが揺らいでいるのが、見ただけで伺えるのだ。

「……………」

「……………」

続く沈黙。今いる場所とは校舎を挟んで反対側……グラウンドから、体育に勤しむ生徒達の声が聞こえてくる。

「……さっき……」

「うん」

ようやく切り出した遼の言葉に、神妙な面持ちで応える優子。

「見ちゃったの……」

「……………」

何を。とは問わない。あくまでも、優子は遼が自分から言つのを待つ。

「佳乃が、幸介に告白してたの……」

「え!？」

さすがに、その言葉を聞いて驚かすにはいらなかったらしく、優子は大声を出してしまった。

「ちょ、それって……」

「……………」

「本当に?」

確認する様に問う優子に、無言で頷く遼。

「……………あの佳乃がねえ……………」

俄かには信じられない。といった風に、肩を竦める優子。だが、遼の真剣な瞳を見て、態度を改める。そもそも、遼が嘘をつく理由はないのだ。

「ごめん」

「ううん、それは別にいい。さつき、胸借りちゃったしね」

と、苦笑を浮かべる遼。その笑みは、少し無理している様に見える。

「それで、村野君の返事は聞いたの？」

「ううん……佳乃の告白を聞いて、直ぐにその場から逃げちゃったから……」

「そっか。まあ、それもしようがないね……でも、どうするの？」

この場でそれを聞くのは酷かもしれない。そうも思ったが、それでも優子はあえて尋ねた。遼の意思を、確認しておきたかったのだ。

「……私は……幸介を、信じてるから」

それは、ある意味曖昧な答え。それでも、優子が納得するには十分な答えだった。

「なら、問題ないよね？」

「……うん」

少し間が空いたものの、それでも確かに、遼はしっかりと頷いた。

「佳乃の事だけど……」

「大丈夫」

優子の言葉を遮る様に、遼が言った。

「佳乃とも、ちゃんと話す」

「……うん、そうだね。それが良いよ」

清々しい。とまではいかないものの、それでも笑顔で、優子は応えた。遼も、微笑みを浮かべた。

「優子」

「うん？」

「ありがとう」

それは、遼の正直な気持ちだった。何も飾る事なく、真っ直ぐに向けた言葉。

「いえいえ、どういたしまして」

応えた優子の笑顔は、より眩しいものに見えた。

遼の表情も、暗く落ち込んだものだったのが信じられない程に、柔らかな笑みを浮かべられたいた。

深まる絆

午後の授業が開始され十数分。教室には、遼と優子の姿がなかった。

さすがの幸介も、遼の姿がない事に気が付き、たちまちに頭の中が遼の事でいっぱいになる。

（綾瀬、どうしたんだろう……）

授業の内容など既に耳に入っておらず、とにかく遼の事を考える。

（そっいや、霧島もいないな……）

ざっと教室を見回し、そんな事に気が付く。

（どういう事だ……？　もしかして、綾瀬と霧島は一緒にいるのか……？）

どんなに考えても、答えは出て来ない。最も、幸介の思いつきは正しいわけだが、どう幸介が頭を悩ませた所で、その理由は思いつきもしない。

「村野」

「……………」

黒板の前に立つ教師が、不意に幸介を呼んだ。だが、幸介はそれに気付かない。

「おい、村野」

「……………」

「村野幸介！」

全く反応しない幸介を見かね、大声で叫ぶ教師。

「はい！？」

さすがに耳に届き、驚きを隠せずに思わず立ち上がる幸介。周囲から、クスクスと苦笑が漏れている。

「そんなに授業は面白くないか？」

「い、いえ……そんな事はないです」

「じゃあ、これからはもっとマジメに聞いてくれよ？」

「は、はい。すみませんでした」

頭を下げ、席に着く幸介。教師はそれで納得したのか、授業を再開する。幸介に答えさせようとしていた問題は、他の生徒に答えさせる。

（今、数学だったのか）

教科書やノートを広げてはいるものの、それは無意識のうちに用意していたらしく、幸介はそんな事を思う。

注意されて早々に物思いに耽る程大物ではない幸介は、とりあえ

ずマジメに授業を受ける事にした。

そんな中、佳乃は思う。

遼が教室にいない理由。それが、自分のせいなのではないかと。

（あの時、もしかしたら……）

聞かれた。なぜか、そう確信すら持てた。

佳乃は腹を決める。おそらく、自分がこれから受ける言葉を、真っ直ぐに受け止めなければならない。それが分かっているからこそ、意思を強く持たなければならない。

（あたしは、結果が分かかって告白したんだから……）

それを知った遼の反応を、予測していなかったわけじゃない。遅かれ早かれ、きっと気付くと思っていた。だからこそ……

（放課後、かな）

おそらく遼もそう考えているはず。なぜかそんな確信も持ち、佳乃は一人心中で頷く。これから先、周囲との関係がどう変わるのか、変わってしまうのか……

変わってしまう事を恐れない為に、自分を奮い立たせる為に……

○

○

午後の授業が終わり、HRも終わる。

幸介はチャイムが鳴ると同時に立ち上がり、荷物も持たずに教室を出る。どこにいるのかは分からない。それでも、探さなければ。幸介は、強くそう感じていた。
が。

慌てた様子で教室を出ようとした所で、幸介は思わぬ人物とぶつかった。

「……綾瀬」

「幸介……どうしたの？」

小さく声を上げてから、ぶつかった相手が幸介だと理解した遼が、きょとんとしながら尋ねた。

「どうしたの？　じゃないっ」

その口調は、いつもの幸介にしてみれば十分に強いものだった。

「どこ行ってたんだよっ？　俺が、どれだけ心配したと思ってるんだ？」

厳しさを帯びながらも、それが本気で遼を心配していたからだ、真っ直ぐに感じられる口調。

「ご、ごめんなさい……でも、大丈夫だから……」

「大丈夫？」

その言葉の意味を理解しかね、首を傾げる幸介。

「ごめん……今日は、先帰っててくれる？」

最近はいつも一緒に登下校をしている二人だったが、遼が物悲しそうな表情でそう呟いた。

「え？ あ、ああ。別にいいけど……」

釈然としないまでも、幸介は頷いた。何となく、そう答えなければいけない気がしたのだ。

「それじゃあ、また明日。いつものところで」

「……ああ」

幸介は頷き、一度荷物を取りに教室に戻る。「じゃあな」とだけ言って、今度こそ教室を後にする。遼が早く帰って欲しいと思っている。幸介はそれを感じ取ったからこそ、それ以上何も追求せずに教室を出た。少し寂しさを覚えながらも、遼の事を信じているからだからこそ、幸介はそれ以上何も聞かなかった。

幸介が帰るのを見送った遼は、教室の中へと目を向ける。

「遼、大丈夫？」

いつの間にかやってきていた優子が、背後から声をかけた。

「大丈夫」

小さく、だけど確かに頷く。

遼の視線は、自分の席から立ち上がった佳乃へと向けられている。佳乃はその視線に気付いたのか、それともその視線が向けられる事

が分かっていたからなのか、遼の視線へと自分の視線を絡ませる。二人の視線はぶつかり合う。どちらもそれを外そうとはしない。沈黙は長くは続かなかった。佳乃が遼へと近寄り、口を開く。

「どこで話そうか？」

「静かなところがいいと思う」

「それじゃあ、この時間なら屋上かな」

「そうね。それじゃあ、行きましょうか」

険悪。というわけではない。しかし、どこかぎこちない雰囲気と口調。優子は二人の為に道を退く。そんな優子に軽く笑みを向けてから、遼は屋上へと向かって歩き出した。反対に、佳乃は優子とは目を合わせようとはせずに、遼の後に続いた。

○

「多分、お互いに何の話なのか分かってると思うけど……」

屋上に着くなり、佳乃が切り出した言葉。何の前置きもないその言葉に、遼は一瞬ドキリとする。

「昼休み。聞いたんでしょ？」

「……ええ」

静かな佳乃の問いに、少し間を置いて頷く遼。

「でも、多分最後までは聞いてない。違う？」

「どうして？」

確信を込めた口調に、遼は聞き返した。

「だって、最後まで聞いてたら、遼は今そんな複雑な表情はしてないはずだもん」

「どういうこと？」

もう一度聞き返す。佳乃は全てを知っていて、自分は何も知らない。そんな錯覚に陥りながらも、それでも答えを求めてしまう。

「その質問には答えてあげる。でも、その前に言っておきたいことがあるの」

「なに？」

「あたしは、村野君のことが好き」

目の前にして、本人の口からその言葉を聞き、少なからずショックを受ける遼。言い切った佳乃に、遼は何も言えない。そんな遼を見て、佳乃は苦笑を浮かべる。

「でもね。遼のことも、好きだよ。だから、自分の気持ちに気付いた時、すごく悩んだ。でも、抑え切れなかった……だから、この気持ちだけは、伝えておこう。そう思ったの」

そう言う佳乃の瞳は、どこか悲しみを帯びていて、遼は思わず視線を逸らしてしまう。逸らしてはいけない。そう思いながらも。

「遼」

名前を呼ばれ、遼は一瞬肩を震わす。瞳を逸らした事が、罪悪感へと結びついてしまったのだろうか。

「あたしは、こう思うんだ。もし、あたしが告白して、遼からあたしにのりかえる様な人だったら、あたしは好きになつてなかった。つて……普通なら、自分の想いに応えてくれたら、嬉しいものなのかもしれない。だから、あたしが勝手にそう思ってるだけ。だけど……そう思っていたい」

「佳乃……」

「遼の中でも、答えは出たと思う。その答えは、間違つてないよ。村野君は、あたしの想いに応えてない。あたしは、ちゃんと振られたから。だから、遼は何も不安にならなくていいんだよ」

「……………」

「あたしは、遼から村野君を奪いたいと思ってるわけじゃないし。ただ……踏ん切りを、つけたかったただだから……」

「佳乃……？」

今まで気丈に振る舞っていた佳乃の語調が、だんだんと途切れ途切れに、弱々しいものへと変わってきた。遼は、佳乃の変化に軽く

動揺する。

「ご、めん……でも、これで、ちゃんと、諦められたから……大丈夫……あたしは、遼も好きだから……ごめん、ね……」

佳乃は俯き、ゆつくりと言葉を発する。遼はその言葉に涙が混じっている事に気が付きながらも、それは見なかった事にした。

精一杯に強がる佳乃。遼の事を思い、自分の気持ちを抑え込んできた佳乃。諦める為の告白。振られる事が分かっていた想い。それをぶつける事が、どれだけ勇気のいる事なのか、遼は知らない。分からない。それでも、佳乃の哀しみは理解出来た。今までに自分が感じてきた幸せ。それが、手に入らなかったとしたら……

そつと佳乃へと近寄り、その肩を抱く遼。自分が優子に助けられた様に、今度は、自分が佳乃を助けたい。そう思ったから。

「ごめんね、佳乃」

だから遼は、そう言った。それは遼のせいではないし、佳乃のせいでもないけれど……それでも、謝ろうと思った。それで、少しでも佳乃の傷が癒えるのなら、と。

「……あたし達、これから友達だよね？」

「……うん」

遼の言葉に、佳乃が弱々しく、だけど確かに頷いた。

それは、ある種の始まり。

一度失いかけるところだった、一つの友情の、新たな出発点。

きつとそれは、前よりも強固なモノとなり、二人の絆をより強く結んでいく。

壊れぬ様に、壊さぬ様に……

二人は、しばらくお互いを感じ合っていた。

風が、屋上を吹き抜ける。やがて訪れるオレンジ色の世界を、静かに待っているかの様に……

チャンスは突然に

普段と何ら変わる事のない風景。

まだまだ春を感じさせる暖かい空気。そよ風に吹かれながら登校する生徒達。

交わされる挨拶。交差する笑顔。平凡な日常。

それなのに……いや、だからこそ多々ある小さな問題の数々。

そんな問題の一つを、一人で抱え込む生徒が一人。村野幸介。それがその生徒の名前だ。

「……………」

幸介は一人、頭を悩ませながら登校している。

問題を解決する為のヒントは揃っている。それなのに、未だに答えを導き出せていない。だから、頭を悩ませている。

「幸介っ」

背後から名前を呼ばれ、幸介は足を止めて振り返った。

「綾瀬……………」

「おはよう、幸介」

「おはよう」

文面だけ見れば、それも日常の一環。しかし、それは少しだけ日常とは違う心境。

「どうかしたの？」

どこか翳りのある幸介に気付き、遼はそう尋ねた。だが、幸介は苦笑して首を横に振る。

「何もないよ」

と。それは日常を装った幸介なりの言葉。遼を巻き込まない様に、遼を心配させぬ様にと、幸介なりの配慮。だが、遼は敏感に感じ取ってしまう。それが、本心ではないという事を。それでも、問いたず事は出来ない。閉ざしていた心を、開いてくれた相手。その幸介が、隠している事の意味。それを察したわけではなく、問い詰めて、今の関係が壊れるのが怖かった。だから、遼はそれ以上何も聞けない。

「……そう？」

「ああ」

それで、会話は終わってしまう。普段からそれ程口数の多くない遼。そして、普段とは違いあまり喋らない幸介。

それでも、これも日常の一環。少しだけいつもと違った、日常……一日の始まり。きっと、午後にはいつもの日常に戻っている事を信じて、遼は何も言わない。

幸介は悩んでいる事を知らず、それでもそばにいたいと思いなだらも……

今日もまた、良く晴れている。

訪れる日常。

いつもと変わらない風景。

村石と高坂の間に入った亀裂。いや、村石が心に抱えている問題。それだけが、幸介にとっては日常ではなかった。だから、ここ最近ずっと頭を悩ませている。

（そろそろ、解決したいよな……）

それは、自分に言い聞かせる為に言葉かもしれない。それでも、今の幸介には必要な言葉なのかもしれない。

解決したい。それは、幸介自身の願いでもある。それに何より、自分を頼ってくれた友人を助けたいと思っている。だからこそ、幸介は確実に解決出来る様に、ずっと頭を悩ませている。

早く。

早く。

出来る限り早く。

誰かが……いや、自分自身の心が、幸介をはやし立てる。

（どうすればいいんだ……）

何か、キツカケが欲しかった。理由や、経緯は既に知っている。

後は、タイミング、そしてキツカケが必要なのだ。

そのキツカケをここ数日渴望していた幸介だったが、それは思いも寄らぬ形で訪れた。

「幸介」

その日の放課後。高坂の方から声をかけてきた。

「ん？」

「話したい事があるんだけど、今日暇あるか？」

その眼は真剣そのもので、幸介も神妙な面持ちで頷く。

「OK。それじゃあ、5時に学蓮に来てくれ」

「わかった」

幸介が頷くと、高坂は満足そうに笑みを浮かべ、踵を返し教室から出て行った。

学蓮。それはここ秀栄高校の近くにある喫茶店で、元より秀栄の生徒達を主な客層にしようとして出来た店だ。因みに、余談だがチエーン店ではなく、秀栄の卒業生が個人で営んでいる。

「5時に、学蓮か……」

時計を見た幸介は、大分時間が空く事に気が付いた。一度家に帰る時間は十分にある。それならば……

「綾瀬」

「なに？」

呼ばれて、直ぐに振り返る遼。幸介の声にはとても敏感な様だ。

「一緒に帰ろうぜ」

「……いいの？」

「いいに決まってるだろ」

何でそんな事を聞くのか。とても言いたげに、幸介は答えた。

「良かった……」

釈然としない点が残ったが、安堵する遼を見て、何となくそんな些細な事はどうでも良く思えてしまう。

遼が、不安そうな表情をしているのは悲しい。安堵した表情や、嬉しそうな表情をしていると自分も嬉しい。幸介は、それを今十分に感じている。

「行こう?。」

「あ、ああ」

少しぼーっとしていた頭を振り、歩き出す遼に続く幸介。

（今日、何とか高坂とは決着を着けないとな）

心の中でそう決意し、幸介は今考えるのはよそう。と再び頭を振った。

「どうしたの?。」

少しだけ心配そうに、遼が幸介の顔を覗き込む。

「いや、何でもないよ」

「そう?」

慌てながら後ずさった幸介を不思議そうに見つめながら、遼が首を傾げる。

「そうそう。ちょっと、ぼーっとしてただけだよ」

「ならいいんだけど」

今は遼の事だけを考えよう。そう頭を切り替え、幸介は楽しく、遼と二人で下校して行った。

○ ————— ○

「よお、待たせたな」

5時を10分程過ぎた頃、学蓮で待っていた幸介の元に、高坂が悪びれた風もなくやってきた。

「遅い」

「10分くらいでケチケチすんなって。それに、俺が時間にルーズなのは知ってるだろ?」

「威張る事じゃないだろ……まあ、知ってるけど」

幸介は嘆息を漏らしながら言うが、高坂は気に留めた風もなく席に着いた。

「それで、話って何なんだ？」

「いきなり本題に入るんだな。まあいいけど」

苦笑を浮かべながらそう言った高坂は、一度目を瞑る。直ぐにその目は開かれたが、その時には高坂の顔つきは一変していた。先程までとは打って変わり、真剣そのものである。

「村石との事だよ」

「……………」

「その顔は、分かってたって顔だな」

「まあな」

微かに苦笑を交えた高坂の言葉に、幸介は頷いた。

「お前も色々聞き回ってみたいだから、ある程度あいつの事も知ってると思う。だから、どうすれば前みたいな関係に戻れるのか、それで悩んでるんだろ？」

「ああ……ホント、お前には隠し事出来ないな」

皮肉混じりの苦笑。こういう過去からの絆が、村石を傷付けているのだ。

「あいつは、自分が独りだと思ってるんだ。昔の事なんて関係ないのに、1年も一緒に過ごせば、そんな差は十分に取り戻せるのに……」

「でも、そう割り切るのも難しいんだろうけどな。だから、村石は悩んでるんだ」

「そうなんだよな……でも、あいつ自身が閉じこもってる以上、俺達にはどうしようもない。特に、あいつに過去を意識させちまった俺じゃな。だから、あいつはお前に相談したんだろ」

「知ってたのか……」

「まあな。とにかくさ、お前なら、あいつの心を開かせる事が出来ると思う。うまく言えないけど、何かそういう力があるんだよ。だから、お前の周りにはいつも人が集まるんだ」

「……それは、俺がそういう風に意識してるからだよ」

「そうだとすると、それがお前の力である事には変わりはないだろ。だから、俺もお前には期待してるんだ」

「高坂……」

「俺だって、仲悪いままじゃいたくないしな」

そう言って、高坂は苦笑を浮かべた。今までの様な暗い笑みでは

なく、どこか朗らかな笑みだった。

「でも、頼りきりつてのも嫌だしさ。仲介に立って欲しいんだ」

「仲介？」

「ああ。俺、村石と直接話そうと思う。でも、俺とあいつだけじゃ、多分何も解決しないから……だから、話に立ち会って欲しいんだ」

「……わかった。そうだな、それがいいよ」

「よし。それじゃあ、明日の放課後な」

「早いな、おい……」

「こういうのは早い方がいい。勢いが大事なんだよ」

「そういうもんか？」

「そういうもんだ」

「……そうだな。よし、それじゃあ明日な」

「おう」

それから少しだけ雑談をし、二人は学蓮を後にした。既に日は傾いており、空の色も大分赤みがかかっていた。

きっと明日も、同じ空が巡る。それでも今日とは違って、きっともっと晴れやかな空に見えるはず。幸介は、帰路の途中そんな事を考えていた。

友達

晴れ。今日の天気を現すのなら、まさしく晴れそのものだった。

白い雲が穏やかに流れ、うららかな日差しが教室に差し込む。一見平和の風景。いや、実際に平和と言える。ただ、心穏やかではない者が数名いるだけだ。

そのうちの一人である高坂は、授業中もずっと物思いに耽っている。何を考えているのかと言えば、それは村石と何を話すのかという事。一度違えた仲を、修復する為にはどうすればいいのか。それは幸介も悩んできた事であり、未だ答えを出せていない。高坂も同じく、明確な答えを得る事は出来ない。それでも、諦めるつもりなどなかった。仲を違えた理由が、一方的なモノだったからこそ余計に、このまま終わらせたくはなかったのだ。

又、幸介も頭を悩ませていた。高坂と村石の話し合いに立ち会う。そう決めて、キツカケを掴んだに過ぎないまま、明確な打開策を得られず、ずっと悩んでいる。

（なる様にしかないよな）

結局は、そんな結論に至る。自分が思っている事、考えている事。それらをぶつける他に、手などないのだ。そう頭を切り替えて、幸介は約束の放課後まではきちんと授業を受ける事にした。

○

昼休み。

幸介は遼を誘って、中庭へとやってきていた。

何の為か——勿論、昼食と一緒に食べる為だ。

「珍しいね」

「何が？」

遼の呟きに、幸介は首を傾げた。

「幸介が、こうしてお弁当に誘ってくれるなんて」

「そうか？」

「そうよ。特に、ここ最近は」

少しだけうらめしそうに言う遼に、幸介は頭を掻いてごまかす。

「そんな事ないと思うぞ」

「そんな事あります」

変に敬語を遣い、幸介をたじらせる遼。幸介に対してはいつも受身な遼にしては珍しく、対等な関係に見える。実際、二人は対等な関係なのだから、何もおかしい事はない。幸介も遼も、その関係を自然と受け入れている。

「そうだな……ここの所、色々とあつてさ……確かに、あんまり綾瀬と話せてなかったかもしれない。だからかな。何か、少しでも一緒にいたくなつたんだ」

何の臆面もなくそう言う幸介。遼は、思わず赤面して俯いてしま

う。しかし、それは心地良いもので――
嬉しくて、顔が綻ぶ。

「明日からは、もっと頻繁にこうやって飯食いたいな」

「うん」

それは、約束という程のものではない。
それでも、二人にとっては大事な会話であり、小さな約束でもあった……



その日の放課後。

幸介、村石、高坂の3人は、屋上へとやってきていた。その場をしばらく支配していたのは、無言。誰一人として、すぐに切り出すことは出来なかった。それでも、幸介がやっとの思いで口を開く。

「何で集まったのか、分かってると思うけど……」

それは、どちらに向けた言葉でもない。自分に確認する様に、小さく呟いた言葉。それでも、二人共幸介へと視線を向けた。

「高坂」

「……………」

「言いたい事が、あるんだろ？」

何かを諭す様に、しっかりとした口調で言う幸介。高坂は頷き、村石へと向き直る。

「村石」

「……何だよ？」

「俺さ。色々、何をどう言おうかって悩んだけど、結局は答えは出なかった。だから、俺は正直に自分の気持ちを伝えようと思う」

真剣な面持ちの高坂。村石は唾を呑み込み、言葉の続きを待つ。

「俺は、村石の事を友達だと思ってる。たとえ、村石が俺の事を嫌いでも。昔の事なんて関係ない。お互いの事を知るなんて限度があるんだから、いくらだって追いつける。だから気にするなよ。また、仲良くやろうぜ」

「高坂……悪かった。俺、色々引きずってたからさ……これから直ぐについてわけにはいかないだろうけど、極力意識しない様にする。俺達は友達なんだって、しっかりと分かっていく。だから、これからもよろしくな」

「おう！」

大仰に頷き、右手を差し出す高坂。村石はその手を取り、二人は手を交わす。一つの友情が、再び交わされた。きつと前以上に強固な絆となって、これから先楽しい事が続いていくはず。まだ見ぬ未来に期待を抱きながら、交わしていた手を離す。

「それじゃあ、これから3人でどこか行くか！」

「いいねえ！どこ行く？」

「ゲーセン行こうぜ。この前新台入ってたんだよ」

「よし。んじゃ、決定だな」

それは日常の「コマ。友情という絆で結ばれた者達が交わす、平
凡な会話。きつとこれからも続いていく、平穏な日常……

不安な気持ちと信じる心

幸介の事を信じていたい。それでも、どこかで疑いを持ち始めてしまっている。遼は、自分のそんな疑惑が許せなかったし、認めたくもなかった。自分は、幸介の事を信じているんだと、そう思いたかった。それでも、一度生まれた感情は、そう簡単には消えてくれない。

遼は一人、通学路を歩いている。いつもよりも少しだけ早く家を出て、学校に向かっていく。歩きながら、幸介の事を考える。最近、どこか上の空な幸介。何か悩みがあるのだろうか、疑問を覚えてからようやく考え付く。だけど、自分では幸介の力になれないもどかしさをも一緒に感じてしまう。

（幸介）

心の中で、愛しい相手の名前を呼ぶ。

自分が幸介の事をどれだけ知っているのか、否——どれだけ知らないのかを、思い知らされる。

（幸介）

もう一度、その名前を噛み締める。その名前が、その人物が、それだけ自分にとって大切な存在なのかを。

「綾瀬っ」

背後から、自分を呼ぶ声が聞こえた。遼はその声に驚きを隠せず、思わず肩をびくつかせてしまった。だが、その次の瞬間には喜びの感情が生まれる。

「幸介」

その声を聞き間違えるはずがない。そう心のどこかで思いつつ、遼はゆっくりと振り返る。その瞳には、少し離れた所から駆け寄って来る幸介の姿が映った。

立ち止まって待っていた遼の元に辿り着いた幸介は、少し息苦しそうに肩で息をしている。

「大した距離でもないのに……運動不足かな」

「そうかもね」

苦笑混じりに、幸介の言葉に頷く遼。

「はあ——あ、おはよう。綾瀬」

「おはよう」

ようやく息を整えた幸介に、やはり苦笑を漏らしながら応える遼。その笑みは、どこか優しいものを含んでいる。

「今日は早いよね？」

「綾瀬こそ」

二人は普段待ち合わせをしているわけではないが、いつも登校中に出会い、結局二人で学校に向かっていた。もっとも、何度か会った内に暗黙的に約束が成されていたとも言えるが。それでも、今日の様なケースは稀だった。二人して、偶然いつもよりも早く家を出た

のだから。

「ちょっと、考え事がしたくて」

「——それは、俺には言えない様な事？」

「そんな事はないけど」

少しだけ悲しそうな表情を浮かべた幸介に、遼はバツが悪そうに返す。

「でも、大した事じゃないから」

「そう？　ならいいんだけど」

幸介はそれ以上言及しない。自分自身、ここ最近遼に何も相談せずにしたのだ。無理に聞き出す事は出来ない。

それから、二人は大して意味を持たない世間話をしながら学校に向かった……

○

綾瀬　遼は、自分でも良くわからない何かに怯えていた。

それは、幸介の事を何も知らないという不安。

幸介が何を思い、何を考え行動しているのかわからない不安。

正体不明の恐怖は、全て幸介によって与えられるモノだ。

「……………」

偶然出会った今朝。不安を隠しきれなかった自分。そんな自分に手を差し伸べてくれた幸助。だけど、それに応えられなかった自分。幸介を信じたい。だけど、自分を信じられない。それならば、幸介を信じたい自分も疑わなければならないのか……

それは矛盾。それはジレンマ。もはや遼は、何を信じればいいのか判断する事が出来なくなっていた。

昼休み。

一人空き教室へとやってきた遼は、ただ黙々と昼食をとる。食べている間も、ずっと幸介と自分の事を考えていた。

それでも、自分が正しいと思える答えは導き出せなかった。

それもまた、不安で仕方がない――

昼休みの間中、ここで考えてみよう。

遼はそう決心し、ふと窓の外に目を向ける。

空が、青い――

もし、この昼休みの間に答えが出ないのならば、誰かに相談してみよう。

今まで思い浮かびもしなかったそんな考えを浮かべ、遼は再び思考に没頭する。相談出来る相手がいる。それだけで、心が軽くなった気がした。だから、今は考える事に集中出来るのだという事に、遼は気が付いていない。もはや、それが自然なものなのだと感じつつある。それは間違いなく、今までの遼では有り得なかった事だ。だから、たとえ遼自身が気が付いていないとしても、遼は間違いなく変わったのだ。

キンコンカンコンコン。

無常にも、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

（放課後、優子達に相談してみよう）

自然とそう思い浮かべ、遼は空き教室を後にした。

○

「綾瀬」

放課後になった途端に、幸介が自分の席にやってきてくれて、遼は何だかそれだけで嬉しくなった。だけど――

「一緒に帰ろうぜ？」

「ごめんなさい」

幸介の誘いを、断る以外の選択肢が思い浮かばなかった。

信じたいのに、どこかで疑ってしまう自分がいる。それが嫌で仕方がない。

「優子達と、約束があるの」

微かに訝しげな表情を浮かべた幸介に、言い訳する様に付け足す遼。

それは嘘。約束など、存在しない。

「そつか。ならしょうがないな」

笑顔で頷く幸介。そんな幸介を見て、遼は胸を痛める。しかし、幸介に今の思いを打ち明ける事は出来ない。

「それじゃあ、また明日な」

「あ」

そう言って踵を返す幸介に、遼は何も言えなかった。ただ、その背を見送る事しか出来ず、そんな自分にも嫌気が差す。

まるで、昔の自分に戻り始めた様で――

（そんな事ない）

脳裏を過ぎったそんな考えを振り払う様に、必死で頭を振る。
このままじゃ、どうかしそうだ。

「遼？」

遼の様子を変に思った優子が、そつと遼の席に近付き声をかけた。

「優子……」

「どうかしたの？」

「……うん」

一瞬、言おうかどうか悩んでしまったものの、遼は意を決して、しかし弱々しく頷いた。

「あたしに、言える事？」

「うん」

「なら、聞いてあげる」

その名前が表す様に、優子は優しく遼に語りかける。

「うん、ありがとう」

優子の前だと、素直になれる。遼は、その事に自分でも気付いていた。なぜこんなにも優子を信頼出来るのか、その理由まではわかっていなかったが、それでも優子には心を許せた。

「場所、変えようか？」

まだ、教室にはたくさんの生徒が残っている。遼は頷き、二人は教室を後にした。

やってきたのは、遼が昼に訪れた空き教室。
二人は適当な席に、向かい合う様に座った。

「それで、どうしたの？」

心配そうに、遼に尋ねる優子。前置きも何もあつたものではないが、それは優子の優しさでもあつた。問題は、早く解決するに越した事はないのだから。

「前に、言ったよね……私は、幸介を信じてるって」

「うん」

「でもね、わからなくなったの」

それは、正直な遼の気持ち。信じたい。それなのに、信じ切れない想い。

「わからなくなったって……信じられなくなったって事？」

「そうじゃないっ。そうじゃ、ないけど……でも、どこかで、幸介の事を信じられない自分がいる。それが、わかるの」

哀しみを含んだ言葉。その感情が、どれだけ遼を苦しめているのか、優子は知る術を持たない。しかし、その苦しみを和らげてやる事は出来る。優子は、その事を知っている。だから、優しく呟く。

「大丈夫」

「え？」

「そうやって悩めるって事は、遼がそれだけ村野君の事を想ってるって事だから。大丈夫だよ」

「でも——」

「大丈夫」

優子の言葉に納得出来ない遼だが、その反論さえ遮り、優子は言

う。

「もう一回言うよ。大丈夫。遼は、村野君の事が好き。村野君も、遼の事が好き。ただ、彼は優しく、不器用なだけだから」

「どういつ事？」

「……………」

遼の問いに、優子は答えない。優子は、遼の知りたい事を知っている。それを伝えるのは簡単だ。だが、それでは本当の意味での解決はない。

「遼」

「？」

「信じる者は、救われるから」

その言葉が、なぜか遼には重く感じられた。だけど——
ずっと信じていた。なのに、相手にされず……

どこかで、信じられなくなり始めてきた。だけど、幸介は自分の事を見てくれる様になってきた。否——戻った。と言っべきか。
なら、自分がどうするべきなのか——

「わかっているのかもしれない」

違う。自分が、すべき事があるはずだ。

それは、信じる事。ただ、相手の事が好きなのなら、信じていればいい。

今、遼は心からそう思えた。

「優子」

「ん？」

「ありがとう」

その言葉は、遼の心からの言葉。だから、優子もそれに応えて頷く。

「どういたしまして」

きつと、こんな関係がこれからも続いていくのだろう。

二人は、とても良い関係を続けていける。

それから二人は別れ、別々に帰宅する事にした。

遼が、行きたい所があるから。そう言ったから。

なぜか、そこに行けば会える気がしたから。

そこに行けば、幸介がいる気がしたから。

急いではない。なぜか、急いではない。そう感じた。だから、遼はゆっくりと歩いている。

まだ日が沈むには早い。しかし、少しずつ傾き始めていた。

きつと、二人が出会う頃には、世界はオレンジ色に染まっている事だろう。

そこに絆があるのなら

思い出すのは、当時の記憶——ただただ、その在るオレンジ色の世界。

父親と暮らしていながらも、事実上？独り？で暮らしていた中学時代。そして、形の上でさえ家を追い出され、本当に独りで暮らしていく事になった。

いつも見ていたのは、あまりにも滑稽な？ニンゲン？の姿。いつも見ていたのは、色の識別の付かないモノクロの世界。

ただ一つ——心に鮮明に焼き付いているモノ。それが、眩しいとさえ思える残照の光り。

ただ一つ。自分の心に差し込んできた、鮮烈なまでのオレンジ色

……

世界が、ただ一色に染まる記憶——

それは、ひどく懐かしいモノだった。

本当に孤独を感じる前——そう、既にその兆候があつた小学生時代。否、それよりもずっと前から、遼はそのオレンジ色の世界を見て育ってきたのだ。

その場所こそが、自分の生きる世界なんだと、ずっとそう感じてきたのだ。

——自分は月みたいなんだ——

そう思っていた。夕と闇の狭間。その瞬間しか、太陽と出会う事がない。そんな存在。

だが——

（私は、出会った）

村野 幸介という、太陽に……

だからもう、悩む必要なんてない。自分は闇夜に潜む月の影などではなく、太陽に照らされる側の？ニンゲン？なのだから。

だから、その？太陽？から離れるわけにはいかない。違う。離れたくない。それが、遼の本心なのだ。

「待っててね」

それは、誰に言った言葉なのか――

確証もない、いつもの場所にいると知っている幸介へなのか。それとも、もっと別の何か――

自分の心なのか……

遼は歩く。

おそらく、幸介がいるであろう、その場所へ……

○—————○

父親がいない。と、イジメられていた小学生時代。幸介はいつも一人で空を見ていた。

いつも班分けの時ははぶかれ、独りになる。

普段から、誰も近寄っては来ない。

上履きを隠され、物を投げられる。

幼心に、幸介は思った。

いつその事、まだ暴力を奮われた方がマシだ。と――

小学校高学年ともなると、それ程目立ったイジメはなくなった。
だが、もはや良好な関係など築けるハズもなく、結局幸介は孤立していた。

やはり幸介は、一人で空を見ていた。

青い空。

白い雲。

時間が過ぎ、世界が一変する。幸介は、その瞬間を知っている。

残照――太陽が沈む瞬間の世界。世界はただただオレンジ色に染まり、まるで太陽が最期に燃え上がっているかの様にさえ思える。
日常では、その瞬間を意識する者はいないだろう。だが、幸介は知っている。その瞬間が、いかに美しいモノであるかを。それと同時に、いかに寂しいモノであるかも。

だから、変わろうと思った。

もう、そんな自分ではいたくなかった。

中学に上がり、幸介は自分から周囲に溶け込む努力を始めた。
いつでも皆の話題に付いていける様に、流行に意識を向けた。どんな些細な事も見逃さない様に、気を配る様にもなった。ただ、皆と仲良くなりたい一心で――

元々の性格が後押しとなったのか、それは本人が思っていた以上に効果があった。

村野 幸介という少年は、確かに？人気者？と呼ばれる人種になったのだ。

それに後悔はないし、自分を偽ってきたつもりもない。

ただ、初めの頃は多少の無理はあっただろう。だけどそれは、一過性のモノに過ぎない。それはきっと、一つの？才能？とも言える。

村野 幸介は、オレンジ色の世界を生きていた。

だが――

それは寂しい事だと自覚していた。だから、抜け出した。

そう――村野 幸介は、その時から変わったのだ。

そうして、綾瀬 遼と出会う。まるで、かつての自分の様な――

陰を帯びた少女に。

もしかしたら、最初から惹かれていたのかもしれない。

あの、初めて瞳を合わせた瞬間から――

○

幸介は、沈みかけの夕陽を一人眺めていた。

普通の人にとっては、特別でも何でもない場所。そこはただの住宅街。特別でも何でもないその場所で、幸介はただ立ち尽くしている。顔は空に向け、やがては消えていってしまう夕陽を見つめている。

（まるで、あの時の空みたいだな）

そんな事を考える。幼い頃、【独り】でいた時に見た空。ただ哀しくて、気分を紛らわす為に見ていた夕焼け。沈みゆく太陽。残照の時……

思い出す。自分が、独りだった時の事を。

思い出す。自分が、なぜこの場所でこうしているのかを。

今幸介がいる場所は、初めて遼と登校の約束をした場所だ。二人の、初めての約束の場所なのだ。

なぜその場所にいるのか——それは、ちょっとしたすれ違いのせい。否、すれ違いとさえ呼べない様な些細な出来事だった。

気持ちを通じ合わせた二人が、それ故に自身を貶めてしまった。お互いを、信用しすぎた為に……

それでも、どこかで期待してしまう。だから、こうしてこの場所にいるのだ。幸介は、そう考える。

世界は今、オレンジ色に染まっている。

空も、街の景色も、幸介に映るその世界そのものが——そして、遼の瞳に映る世界も——

「あの」

背後からそんな声が聞こえて、幸介は肩を震わせた。

その声は、今自分が最も求めている声。綾瀬 遼という、一人の少女の声だった。

「綾瀬」

幸介は、ゆっくりと振り返った。そこには、間違いなく遼が立っている。

「お待たせ」

遼は、慣れない笑みを浮かべながらそう言った。

そのはにかんだ様な笑みを見て、幸介は胸をホツと撫で下ろした。その安堵は、遼がこの場所にやってきたからではなく、自分にまだ笑みを浮かべてくれるんだと、そう思えたからこそその安堵とも言える。

だけど、今は単純に――

（綾瀬と会えたから）

そう、思う。

「会いたかった」

「私も」

二人の間に、もう壁はない。言葉すらも、多くは必要とはしない。ただ傍にいられるだけで、二人の心は満ち足りていく。

「ごめんなさい」

「ごめんな」

二人の声が重なる。そして、一瞬の沈黙。

「……………」
「……………」

どちらからともなく、小さく笑い声が漏れ始める。

きつと、お互いに何を言いたいのかが理解出来たから。二人は、今まで以上にお互いの事を信じられる様になったから。

「ありがとう」

幸介は言った。今は、その言葉がしっくりくる。そう、思ったから。

「幸介」

「ん？」

幸介が疑問符を浮かべた瞬間、遼は幸介との距離を詰め、その唇を奪う。

「あ、綾瀬？」

遼の不意打ちに、幸介は慌てふためく。だが、それは決して嫌な事なんかじゃなくて、むしろ嬉しかったりする事で……

「遼」

「え？」

「遼って、呼んで欲しいな？」

遼が、上目遣いに幸介に言う。懇願。とまではいかないものの、どこか必死さが感じられる口調。

「……遼」

少しだけ恥ずかしそうに、だけど、それ以上に幸せな気持ちで、幸介はその名前を呼ぶ。

「うん」

「遼」

もう一度。その名前を噛み締める様に……

「キスしていいか？」

「……うん」

恥ずかしそうに、それ以上に幸せな気持ちで遼は頷いた。

二人の想いは、一つに交わる。

幸介が、遼を抱き寄せ——その唇を、そっと重ねる——

二人が生きてきたオレンジ色の世界。それは哀しい思い出と共にある。しかし、今それらを全て払拭してしまえる様な、最高の思い出が刻まれる。

オレンジ色の世界。それは、二人の幸せを祝う世界。口付けを交わす二人を、優しく、暖かく包み込む世界。

お互いのぬくもりを感じながら、二人はしばらく、そのまま——
幸せな瞬間を、過ごしていた……

幕

ある年の春。毎年どこでも行われる入学式。それは、卒業という別れを経験した後に訪れる出会いの場。

私立秀栄高校。その校舎を少し前に卒業したばかりの生徒が一人、入学式に参加するわけでもなく訪れていた。

「何だか懐かしいな」

それは、少しおかしな気持ち。まだ卒業して何ヶ月と経ったわけでもないのに、ひどく懐かしく思える。

「ああ、そうか……」

なぜ懐かしく思えるのか。それは、既に通う事のなくなった校舎に感じているのではなく、二度と感じる事のない？高校生活？という空気に感じているのかもしれない。

そんな答えに達する。

体育館から、入学式を執り行う声が聞こえてくる。マイク越しの声が、最早？言葉？として判断出来ない？音？として漏れてくるのだ。

そんな体育館を校舎前から眺めていると、背後から誰かが近付いてくる足音が聞こえてきた。

それが誰だかわかっているから、あえて振り返らない。

「幸介」

名前を呼ばれるまで——そう思っていたら、直ぐに名前を呼ばれ、

幸介と呼ばれたその卒業生は振り返った。

「遅かったな？」

「そう？」

幸介が振り返った先に立っていたのは、腰程まで伸ばした長い黒髪の少女。否——少女から大人の女へと変わりつつある、そんな雰囲気を持つ女性。

彼女も、幸介と同級の卒業生だ。

少しだけ気の強そうなその瞳が、今は優しく微笑みを浮かべている。それは、紛れもなく幸介に向けられた笑みだ。だから、幸介も表情を和らげる。

「遼……少し見ないうちに、綺麗になったな」

「な、何言ってるのよっ」

遼と呼ばれたその女性は、いきなりの言葉に慌てふためく。

「いや、本気で言ってるんだけど」

真剣な表情の幸介の言葉に、遼は思わず頬を赤らめ俯いてしまう。

「さて」

そんな遼の様子をどこか嬉しそうに見つめながら、幸介は言葉を切り出した。

「それじゃあ、お互いに報告しようか？ その為に、こうして約束

してたんだしな」

そう。この二人は、約束してこの場所に集まった。それは、幸介の先の言葉からも読み取れる。

では、どんな約束を交わしたのかと言えば……

「せーので言っぞ？　せーの」

『合格』

二人の言葉が、静かに重なった。合格。その言葉が意味する事。それは、二人の進学先について他ならない。

二人は、同じ大学を受験する事にし、学校以外で会う事も少なくなっていた。

一緒に勉強をするという選択肢は選ばれず、二人別々に勉強してそれでも一緒に合格しよう。そんな約束を交わした。

そして、結果を発表するのは、卒業した高校の入学式の間で。それまでは、会わない様にと。会えないからこそ、会いたいと思う気持ちで頑張れる。そう思ってた事だった。

結果は、先の二人の言葉通り。

「入学式、一緒に行こうね？」

「ああ」

高校生活で培った二人の絆は、こうして続いていく。
大学生活。そして、きっとその先も――

【独り】を好む少女がいた。

【独り】を嫌う少年がいた。

二人が出会った時、お互いに惹かれ合い……

恋に落ちた。

少女は【独り】ではなくなり、少年は何よりも大切なモノを手に入れた。

人と人の心には、きつといくつもの壁がある。それは人が唯一ではなく、人の数だけ思考があるから。だけど、その壁に越えられないものなどない。人と人は、分かり合える存在だから。

言葉を遣い、気持ち伝え、通じ合える。そんな存在だから。人と人は、心の中でつながっている。

少なくとも、村野 幸介と綾瀬 遼の二人は――

誰よりも、強い絆で結ばれている――

The End .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5935x/>

ココロノカベ

2011年11月16日12時44分発行